法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

美術解剖学の移植者 ： 本多錦吉郎

宮永, 孝 / MIYANAGA, Takashi

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Hosei journal of sociology and social sciences / 社会志林
(巻 / Volume)
50
(号 / Number)
1
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
60
(発行年 / Year)
2003-07
(URL)
https://doi.org/10.15002/00021003

美術解剖学の移植者

本多錦吉郎

宮永孝

洋画排斥論[1]がさかんであった明治十年代の中頃、小石川区新小川町二丁目八番地[2]にある画塾「彰技堂[3]」では、口ひげをはやした三十代の温厚な教師・本多錦吉郎（一八五〇～一九二一、明治期の洋画家）が、熱心に生徒を薫陶していた。当時、市内で絵画を教える機関としては、官立では明治九年（一八七六）十一月に開校した工部美術学校があり、その他画塾が二、三あるだけであった。すなわち、川上冬崖の「聴香読画楼」（明治三年ごろ、下谷仲御徒町）、高橋由一の「天絵楼」（明治六年、日本橋浜町）、国沢新九郎の「彰技堂」（明治八年、麹町平河町）や横浜在住のチャールズ・ワーグマンの塾などがそれである。[4]黎明期の洋画界にあって、絵画の技法についての教育を率先して行なった本多錦吉郎にわたしが興味をおぼえたのは、いま手がけている美術（芸用）解剖学とのかかわりにおいてであった。

本多錦吉郎（明治9年，27歳）
『洋画先覚　本多錦吉郎』（昭和9・9）より

斯学はヨーロッパにおいて五百年以上の歴史を有しているが、日本に伝わったのは明治初期であり、官立の学校に先んじてそれを初めて日本人に教授したのは、医学者ではない、美術家の本多錦吉郎であった。

ところで人体解剖の経験がない本多が行なった美術解剖学の講義とは、いったいどのようなものであったのか。かれは何をより所としてそれを行なったのであろうか。本稿は、絵かきや彫刻家にとって不可欠の人体の骨ぐみや筋肉のしくみを、わが国ではじめて画学生に説いた、美術教育家・本多錦吉郎の美術解剖学について論じたものである。

わたしは久しく美術解剖学の日本伝来とその紹介者について関心があり、いろいろ文献をあさっているうちに、ようやく本多錦吉郎に行きあたったのである。

本多の存在を教えてくれたのは、尾埼尚文（近代絵画史研究家）の論考「国沢新九郎・本多錦吉郎手沢の洋画技法書」（『参考書誌研究』第十五号所収）であった。

本多は明治七年（一八七四）、洋画を志して国沢新九郎（一八四七〜七七、もと土佐藩士、明治前期の洋画家、イギリスで西洋画を学んだのち画塾・彰技堂をひらく）[5]の塾に入り、のちそこの塾頭となり、明治十年（一八七七）三月十二日国沢が亡くなるやその私塾を引きついだ。

彰技堂は、明治八年新橋竹川町に画塾の分室を、明治十年五月には塾舎を神田今川小路に移転し、さらに明治十二年（一八七九）には小石川区新小川町（江戸川大曲の河岸）に校舎を新築し、洋画教育普及につとめた。その新装の画塾に入門した中村鈴子（中村こう。慶応二年十二月二日生まれ、のち『婦人世界』の記者となり、昭和十六年四月十一日死去）は、「思ひ出」（『日本美術界』第二巻第三号所収、大正9・3）のなかで、人体解剖（美術解剖学）の授業をうけたことをつぎのように語っている。

> 画用幾可と遠近法も一週に一二回づゝ教授されました。先生は小学教師のやうに、黒板の前に立つぐけて生徒がすっかり判るまで悉く説明されました、人体解剖の講義も一週に一度づゝありました。

生徒の中村が入塾したのは、明治十三年（一八八〇）九月のことである。

注・傍点は引用者による。

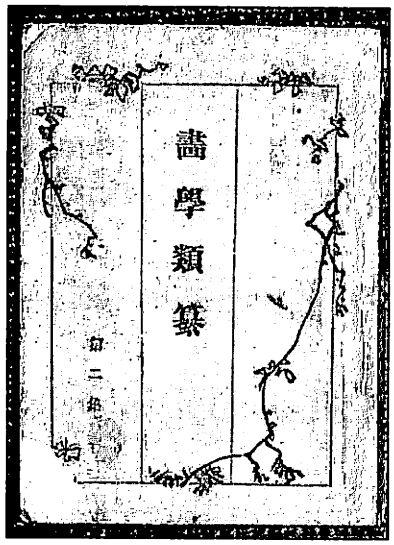
工部大学附属工部美術学校が、東京大学医学部から解剖学の準講師・玉越興平を招いて、一週間に二回「彫刻画学ニ必要ナル生理解剖学」[6]を生徒に教えたのは、明治十四年（一八八一）一月二十五日のことだから、彰技塾ではそれよりも四、五ヵ月早く人体解剖について教授したことになる。

本多錦吉郎が講義の粉本としたのは、ヘンリー・ウォーレン Henry Warren が著わした「人体の美術解剖学」（*Artistic Anatomy of the human figure*）であるが、かれは明治十年代からそれを少しずつ訳しながら塾生に伝えたのである。

その訳稿を明治二十三年（一八九〇）九月から翌年二月にかけて、『画学類纂』に「美術必携人体解剖編」と題して、他の美術応用の規範とともに、六回にわたって分載した。かれは同書の第一集において、

絵画彫刻術ニ必用ナル人体解剖ヲ親切簡明ニ説示ス　（七頁）

とのべ、さらに斯学を学ぶ大要について、つぎのように述べている。



『画学類纂　第二集』
（東京大学明治新聞雑誌文庫蔵）

凡ソ人体ノ骨格筋肉ハ　画家彫刻家ノ主トシテ知ラサル可ラサル要項ナリ。
作家主トシテ注意スヘキ所ニシテ　チ骨格筋肉ハ是カ主要ノ基礎ナリ
凡ソ外貌ノ華美ヲ仮装偽作スルハ　初学ノ為メニ大碍碍タリ。宜シク内部ヨリ攻究スヘキナリ。死体ヲ臨摹シテ　以テ活人（生きている人―引用者）ヲ作ラント欲スルハ　誤謬是ヨリ大ナルハナシ。古製ノ彫像ハ　学者ノ好模本ナリ。学者之レニ依テ裨益ヲ得、外ニ人体解剖ヲ弁（わきま）ヘ　又照影法ヲ学ヒ、物状ノ変化スル実況ヲ熟知セハ、人物ヲ描クノ難事ハ、適宜練習ノ効ヲ以テ、打チ勝ツ「こと」ヲ得シ（「総論」）。

いま引いた文章は、わが国においてはじめて〝美術解剖学〟のことが活字となり、

さらにその語の簡単な定義、美術家が知っておかねばならない要綱としての解剖学について記した貴重な記事である。

本多は、絵かきが自然を写生する研究の第一歩として、人間の裸体を描くことと考え、人体研究によって運筆の練習をし、さらに人間の体軀の組織を知ることは美術上大きな利益があると考えた。[7] すなわち、美術家にとって、人体解剖についての知識は必須であるとの考えから、本多はウォーレンの論文を講述したのであろう。

原著者のヘンリー・ウォーレンはいかなる人か。その経歴を知るのに手間取ったが、最近、『絵描き、彫刻家、デザイナー、版画家についての批評および記録の辞典』(E. Bénézit: *Dictionnaire critique et documentair des peintres, sculpteurs, dessinateurs et graveurs*, Gründ, 1999) によって、ようやくその略歴を知ることができた。

かれは一七九四年九月二十四日ロンドンに生まれ、一八七九年十二月十八日同地において没した。享年八十五歳であった。生前、油絵画家・水彩画家・挿絵画家として活躍した。美術に関する著述はけっして多くはないが、そのうちの一つが「人体の美術解剖学」(一八五六年) である。

当初、絵筆を手にするよりは彫刻の方に興味があり、そのためジョン・ギブソンに師事した。一八一八年ウォーレンはノミを捨てると、こんどは絵筆をもつようになり、英国王立美術学校に入学した。

はじめは油絵をやり、ついで水彩画に転じたが、後者においては一応の成功をおさめた。一八三五年「ニュー・ソサエティ」の会員となり、四年後その会長に選ばれた。

「美術必携人体解剖編」は、骨部と筋部に大別することができるが、どのような内容のものか、つぎに一部引いてみよう。書き出しの骨部は、つぎのような文章ではじまる。

総論

人体骨格ノ構造ハ大概次ノ如シ

人体ノ骨格ハ　骨膜(バリチストナーム)ト名クル強剛ナル物ヲ以テ全部テ包羅(ほうら)シ（ひっくるめる）　殊ニ諸関部ハ包裹(ほうか)スル（つつむ）「(こと)最モ堅固ナリ

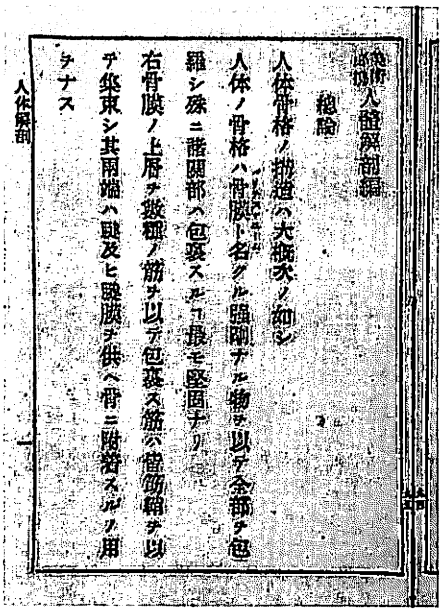
右骨膜ノ上層ヲ数種ノ筋ヲ以テ包裹ス　筋ハ皆筋鞘ヲ以テ集束シ　其両端ハ腱及ヒ腱膜ヲ供ヘ　骨ニ附着スルノ用ヲナス
筋ニ二種アリ　一ハ肉ノ繊維ヨリ組織シ　其位置方向ヲ種々ニ取リ以テ　其運動作用ニ応ス　他ハ種々ノ腱及ヒ神経系ヨリ成レリ

また筋部の冒頭とおもわれる文章は、つぎのようなものである。

額ハ人種ノ異ルト　又同種中　各人ニ於テ異ル所甚タ大ナリ（中略）人体ノ筋肉中顔面ノ諸筋ハ　頗ル画工ノ意ヲ労スルモノニシテ　其差異ヲ見出ス「甚タ難シトス

面部の諸筋ハ　皆ナ筋鞘ノ内ニ包裹セラレ　錯雑セル網状ノ筋条ヨリ成レリ　此諸筋ハ骨部ニ附着スルノ外　叉腱膜及ヒ腱ニ連結シ　或ハ皮ニ粘附シテ　其動作ハ其形状ニ相応セス　其繊維トハ異ナル方向ニ皺襞ヲ生ス[8]

なお、書中には、骨格・頭蓋骨・顔面部・肩関節と胸骨、大胸筋・三角筋・上腕二頭筋、筋系の全景（前面）、人体の背部、腕の各筋肉と骨、脚の各筋肉と骨、ひざ（膝蓋靭帯）などの挿絵がたくさん添えられている。


美術必携人体解剖編
総論
人体骨格ノ拵造ハ大概次ノ如シ
人体ノ骨格ハ骨膜ト名クル強剛ナル物ヲ以テ全部ヲ包羅シ殊ニ諸関部ハ包裹スル最モ堅固ナリ
右骨膜ノ上層ヲ数種ノ筋ヲ以テ包裹ス筋ハ皆筋鞘ヲ以テ集束シ其両端ハ腱及ヒ腱膜ヲ供ヘ骨ニ附着スルノ用ヲナス
人体解剖
一

『美術必携人体解剖編』の最初のページ。

これらは訳者自身の製作によるものではなく、原書から採ったものである。『画学類纂』（第一集～第九集）は、明治二十三年（一八九〇）秋にはじめてその第一集が刊行された。

本の大きさは、12.5 cm×8.5 cmであり、およそ四六判の半分くらいである。各冊の厚さは、約0.6 cmである。同書は五百部限定で、毎月一回発行されたが、本多錦吉郎の自費出版[9]であった。一冊が十二銭であった。

『画学類纂』が刊行されるに至った経緯については、「緒言」に記されてい

るが、それによると、某日、書物を虫干ししていたとき友人の来訪をうけ、本多の記稿をみた友人から出版を勧められたという。しかし、貧しさゆえに出版する資力はなく、長いあいだ箧底にあったが、ようやく日の目をみたのである。わたしは現物を東京大学明治新聞雑誌文庫で見たが、国立国会図書館、神奈川県立博物館[10]も架蔵している。

彰技堂は、塾舎と教場をかねた十畳二間の部屋からなっていた。そこに斜面の板を取りつけた細長い机[11]がならべてあった。明治十三年当時、通学生が四、五十名、入塾生が二十名ほどいた。[12]通学生の月謝は、五十銭ほどであった。

この画塾は、単に絵画の技巧のみを教える所ではなく、本多の人格を反映して、一種の〝宗教学校〟の感じさえしたようだ。本多はいつも、

――美術家は国民の気品を左右する大責任があるから、学問を修めて、人格と趣味の向上を計らなければならぬ。

といって、東西の大家の人物評をしたそうである。[13]塾生は本多より精神教育をうけた。

この塾では、男女の生徒が自由に接近することを黙許していたが、節操問題についてはうわさも立たなかった。女子生徒は自尊心がつよく、一方男子生徒も気風が高潔であったからである（中村鉛子「思ひ出」）。

本多錦吉郎は、嘉永三年（一八五〇）十二月二日、芸州（広島）藩士・本多房太郎の長男として、江戸青山穏田の藩邸において生まれた。[14]少年のころ早くも家庭上の大厄難（祖父と父が一週間も立たぬうちに病没した）に遭い、しばらく家禄をはなれざるを得なくなった。

のち家名再興がなったが、九歳の錦吉郎は十五歳[15]として取りあつかわれた。かれは幼少のときから絵画を好んだ。「私は幼い時から画が好きだったので、同藩中の者に文晁風の画を描いた人があったから、その人に手本を貰って少々習った事がある」と述懐している（「西洋画と東洋画」『美術新報』第十一巻第二号所収）。広島藩は明治元年（一八六八）十月、三原洋学所の教官で絵画をこのむ[16]イギリス人のブラックモアー兄弟を広島に招いて、英語とイギリス式軍事訓練を藩士に教授なさしめたとき、[17]錦吉郎は選抜生のひとりであった。

このときはじめてかれは、練兵と英語とを学んだのであるが、どちらかといえば英語を学習することに精力を注いだ。慶応四年（明

治元年＝一八六八)、このころ藩士野村文夫という人がイギリスから帰国し、自宅に家塾をひらいたので、錦吉郎もそこに通って英学修業をした。

明治三年（一八七〇）の春、藩立学校の洋学の助教授を命じられ、それに従うこと一年、翌明治四年廃藩置県を機に上京し、慶応義塾に入学[18]し、約一年間英学[19]をまなんだ。

明治四年（一八七一）の「慶応義塾入社帳」（入社姓名録）に、本多の名を見いだすことができる。

本人姓名　本多錦吉郎
府藩縣　廣嶋縣
身分　士族
宿所　三田一丁目
父或ハ兄弟の姓名（自分當主ナレハ記ルスニ及ハス）　岡村屋久兵衛
年齢　十九歳
社中ニ入タル月日　未ノ十月ホ三日
入社證人ノ姓名　熊谷大属[20]

洋学（西洋学）を教授する私塾であった慶応義塾は、明治四年三月新銭座より三田の丘上に移転した。当時の学生数は、二六〇名[21]ほどであった。

慶応義塾の学問は、日本の洋学の歴史的伝統の正系をゆくものであり、塾主である福沢の教育の目的と抱負を体していた。当時は洋学といっても、英書を読んで百般の事理に通じるのが目的であった。そのころ英語を話すことよりも、原書を読む力を養うのが教育の主目的であり、世間では洋学（西洋学）のことを〝意味学〟と称えていた[22]。

義塾の教師は、福沢を筆頭に、その他鉄砲州時代に学んだもと塾生のうちから、比較的優秀なものを教師として採用し、教授陣を構

成していた。

教授法は、まず開成学校で刊行した〝木の葉のような片々たる英文典〟（『英吉利文典』［文久二年～慶応三年刊のことか］）を三ヵ月ほど学んだのち、地理学、博物学、窮理学書を六ヵ月[23]ほどかけて学び、歴史や政治学の書物はそれを手写[24]して読んだ。第一段階の教え方は、蘭学時代の輪講（会読）をほうふつさせるやり方であり、つぎの段階は学生の才とやる気にまかせての〝独学〟または〝自習〟であった。

義塾時代の本多の学習の様子や成績などについては分からぬことが多いが、勤惰表のところどころにその名がみえる。

試業出席素読出席第十等
ケケ　二　本多錦吉郎

（明治四年十一月「慶応義塾学業勤惰表」より）

試業出席素読出席第十等
ケ　六　本多錦吉郎

（明治四年十二月「慶応義塾学業勤惰表」より）

本多は明治五年（一八七二）工部省の測量司の見習い生徒となり、イギリス人教師イントンに普通学を、ジョンズ（絵画を愛好する）に測量術をまなんだ。

その後、脚気をわずらったので、測量司を辞していったん広島に帰り、明治七年（一八七四）ふたたび上京した。このとき多年の宿志である洋画を研究するつもりであった。たまたまイギリスから帰ったばかりの国沢新九郎が画塾（「彰技堂」）をひらき、塾生を募集していることを知り、ただちにその門に入った。[25]

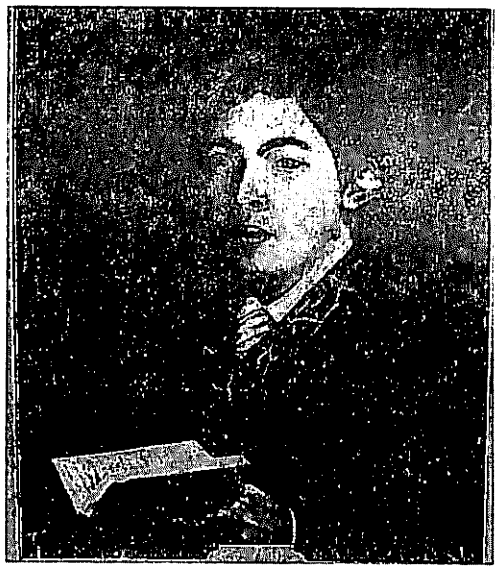
ここで本多が師事し、イギリス流の洋画について教えられた国沢新九郎の経歴についてすこしふれておきたい。

新九郎は、国沢四郎右衛門好古（よしふる）の長男として、弘化四年（一八四七）十二月二十二日高知市外小高坂村に生まれ、幼名を熊太郎といい、のち新九郎と改め、泉とも称した。父は禄百五十石をはむ土佐侯の家臣であり、幡多郡奉行を勤め、勤王の志があつかった。

新九郎は武士の家に生まれた身として、まず武をもって身を立てることを考えたが、時代の変革の跫音（あしおと）が身近に迫っていた。慶応三年（一八六七）九月、かれは第一大隊二番小隊司令と命じられ、下級将校として実社会に第一歩をふみだした。

同年十月、第二大隊二番小隊に転じ、さらに十八番小隊司令を仰せつけられた。同年暮れ、京坂に派遣され、藩の軍艦羽衣丸に乗船し、翌慶応四年正月六日大坂に着した。このときすでに鳥羽・伏見の戦いがはじまっていた。その後、新九郎は小隊司令として、京都、大坂、中国、松山などへ派遣された。

明治元年（一八六八）八月、砲術局陸軍所指南役を仰せつけられ、九月同役を被免された。同年十一月、海軍局頭取に任じられ、翌明治二年二月海軍指揮役兼大監察を拝命し、のち軍艦夕顔丸の船将として箱館に渡った。九月江戸湾に帰着し、のち兵卒らを同道して土佐に帰った。



国沢新九郎の自画像
『みづゑ　第182要目』（昭和9・4）より

明治三年（一八七〇）に至り、土佐藩は留学生をイギリスに派遣することになり、最終的に左記の五名が選ばれた。

法律・政治学修業……真辺　戒作（一八四八～七九）
海軍修業……松井　正水（一八四一～？）
海軍修業……馬場　辰猪（たつい）（一八五〇～八八、明治前期の自由民権家）
海軍修業……深尾　貝作（生没年不詳）
法律・政治学修業……国沢新九郎（一八四七～七七、明治前期の洋画教育家）

この五名が選ばれるに先だって、最初四名の若者（小島捨蔵［29］、小笠原彦弥［26］、川上友八［24］、谷神之助［?］）らが選抜された。しかし、かれらは明治三年正月――出発の前々日、遊廓において酒の勢いで加賀藩士とケンカをし、正月四日その本陣に斬込んだ。そして翌五日の明け方、藩に迷惑をかけたことで、全員自害した。[26]

ともあれ真辺ら一行五名は、明治三年七月二十一日アメリカの郵船「パシフィック・メール」号で横浜を出帆すると、ひとまずサンフランシスコを目ざした。折からイギリス人ラウダー（横浜税関顧問）[27]が帰国の途にあったので、同人に半年分の留学費として洋銀二三三〇ドルを託し、さらに五人の監督[28]を依頼した。

一行は横浜を立って二十数日目にして、サンフランシスコに着くと、観光に数日使ったが、見るもの聞くものに〝驚心動魄（きょうしんどうはく）〟[29]（ひじょうにびっくり）した。それから汽車にのると、東部にむけて走り、ソールトレークシティー（ユタ州の州都）、オーバーン（ニューヨーク州中部）、ナイヤガラ、オールバニー（ニューヨーク州の州都）などに泊ったのち、[30]ついにニューヨークに到着した。

ニューヨークでは、「セントニコラス・ハウス」に六日間滞在した。この間にかれらは市（まち）の大観やホテルの内部に肝をつぶし、また博物館の珍奇に一驚を喫したということである。[31]その後、一行は船にのり、十一日間の航海を経てロンドンに着くと、日本人がよく泊った「チャーリング・クロス・ホテル」（当時の一流ホテル、いまも営業）に旅装をといた。そこへJ・J・ダニエルという名の牧師がやって来て、一行をイングランド南西部ウィルトシア州の一寒村――キングトン・ラングレエ Kington Langley という所に連れてゆくことになった。

ところが日本人五名を迎い入れる下宿の準備がまだととのっていなかったので、ラングレエから三マイルほど離れたところにあるチペナム Chippenham（ブリストル市東二〇マイル、エイヴォン川河畔の町、トウモロコシとチーズの市が立つことで有名）で部屋の準備ができるまで滞在した。

のち一行は、キングトン・ラングレエ村で半年ほど暮らし、この間にJ・J・ダニエル牧師から英語などを学んだ。そのあと一同は、ウィルトシア州の市場町として知られているウォーミンスター Warminster に移った。五人の中でも馬場辰猪は、他の者たちよりも英語がよくできたので、私立の「ロード・ウェスモス・スクール」[32]に移り、そこで半年ほど幾何・地理・歴史[33]などを学んだ。その後馬

場はロンドンに出、ガワー街一〇三番地に住むクーパー氏の家に下宿し、そこからユニヴァーシティ・カレッジに通い、物理学の授業に出席した。

さて、この稿の主人公国沢のことである。かれは渡英前、藩の命令で法律や政治学を修めることになっていたが、どういうわけかイギリス滞在ちゅう所期の目的を果たすことなく、洋画の方に百八十度の転向をしている。

馬場辰猪には勝弥（孤蝶はペンネーム、一八六九～一九四〇、明治学院に学び、中学校教師を経て慶応義塾大学の英文学の教授となる）という弟がいた。同人は兄の伝記（「馬場辰猪自伝」）を著している。「外遊」（一）に、土佐藩のイギリス留学生のことも少し出てくるが、孤蝶が描くその人物像はなかなか辛辣である。

孤蝶は、兄馬場をのぞくと他の四名は日本語や英語においても無学な者たちであったといい、「それらの者どもを教える仕事を辰猪が引受けならなければならなくなった」と書いている。進歩の見込みのない者を教える仕事は、じつに張りあいのないものであった。能力に欠ける者が、海軍や法律や政治学といった高尚な、しかもむずかしい学問を学ばねばならないことは、本人にとって迷惑千万なことであるばかりか、ひじょうに不幸なことであった。そんなかれらをヨーロッパに送ったのは参議・板垣退助の責任でもあった、と述べている。

四人の留学生のうちでいちばん愚物であったのは、その真偽のほどがわからないが、真辺と国沢であったという。

> 四人のうちで、最も愚鈍であった真辺と国沢の二人が、政治学即ち直訳すれば政治の科学を学ぶことを命ぜられていたのであるが、その政治科学なるものは一体何んなものであるのか誰も知っている者はなかったことをこゝに附言して置いてよからうと思ふ（「馬場辰猪自伝」）。

つまり孤蝶にしたがえば、四名の留学生たちはそれぞれ専攻する科目を、能力不足から修得するに至らなかったということであろう。国沢の場合、転向したもう一つの理由と考えられるのは、健康に問題があったことである。すでにかれは結核に犯されていた。そのため辰猪の勧めもあって、洋画の修業をすることになったというものである。(34)

ともあれ国沢は、イングランド南西部の田舎からロンドンに出ると、ジョン・エドガー・ウィリアムズ John Edgar Williams（一八四六〜八三）という絵かきに師事し、その技をみがいた。が、明治六年（一八七三）政府から〝英国官費留学生〟四十二名に帰国命令が出るにおよんで、その中に入っていた土佐藩留学生五名は、帰国せざるをえなくなった。ただし馬場と真辺だけは、明治十一年（一八七八）までロンドンにとどまった。[35]

明治七年（一八七四）、国沢は足かけ四年の留学をおえて帰朝した。帰国後、国沢は洋画の研究と教育に従事し、[36] 西洋画法をひろく伝播せんと欲し、住居を麹町区隼町[37]十二番地に定め、画塾・彰技堂をひらいた。

弟子が徐々にふえるにつれて、文明開化の一助とすべく、美術学校建設の議をときの文部省に建白[38]したが、かれの意見はすぐに採用にならなかった。国沢はさらに京橋竹川町に洋画展覧会を開設し、洋画思想の鼓吹[39]につとめた。

国沢が彰技堂を開設するにあたって発表した趣意書（マニフェスト）があり、その全文をつぎに引いてみよう。

彰技堂趣意書

夫レ画ノ徳（絵画の利益―引用者）タルヤ　文字ノ及フ可ラザル所ヲ模シ　言語ノ尽ス可ラザル所ヲ達シ　人ヲシテ座ガラ未ダ見サルノ地ヲ見、　千古（千年）得テ尋又可ラザルノ域ニ遊フル得セシムルノミナラズ　夫ノ弾丸雨注ノ状ヲ写セバ　則チ碧血淋漓（なまなましい血の流れ）ノ間ニ出没スル思ヒヲナシ　猛獣怒号ノ態ヲ描ケバ　則チ戦慄畏懼（恐怖）ノ念ヲ生セシム

況ヤ又既ニ逝ケルノ親ニ侍シ　既ニ死セルノ師友ニ見ユルヲ得ルノ思ヲナサシムル者

独リ此画ノ真ヲ伝フルニ非ンバ　何ニ由テカ之ヲ致スヲ得ンヤ　然ラバ則チ其信功妙用（巧みなわざ）之ヲ文字ノ右ニ出ヅルト云フモ　亦或ハ可也　是画（洋画）ノ国家ニ緊要ナル所以ニシテ　欧州各国之ヲ高等学科ノ中ニ置キ　徒ラニ画工者（絵かき）流ヲ以テ目セザル所以ノ者也、

本邦古来種々ノ画法アリト雖モ　概ネ粗（そまつ）ニシテ　精シカラズ（すぐれたものではない）、其精霊（神秘な力）真ニ迫ルノ妙ニ至リテハ　則チ之ヲ欧洲ノ画法ニ比スレバ　特ニ俑（死者の代わりに副葬する人形）ト芻霊（死者の代わりに葬った草をたばねて作った人形）トノ比ノミ非ル也、

余ヤ曩ニ（さきごろ）朝命ヲ奉ジテ欧洲ニ留学シ　親シク其人ニ就テ画法ヲ学ビ　略（要点）一二ヲ窺フコトヲ得タリ　而シテ本邦ノ漸ク歩

ヲ文化ノ域ニ進ムト雖モ　画学ノ未ダ開ケザルヲ見　自ラ揣ラズ（推しはからない）、深ク杞憂ヲ此ニ抱キ　亀勉従事（ゆっくりと学んだ？）此学ヲ拡張シ　以テ皇国文化ノ万一（ほんのすこし）ヲ稗補（おぎない、たすける）セント欲ス、苟モ此学ニ志アル者ハ　冀クハ協心戮力（一致協力）以テ益々其盛業ヲ計ラン事ヲ。[40]

国沢新九郎識

彰技堂平河町記念写真［明治9・6・25撮影］
（『洋画先覚　本多錦吉郎』昭和9・9）より

この趣意書をもって、国沢の画学思想のすべてを窺うことはできないが、少くともその片鱗を知ることはできる。かれは文字に取って代わる表現手段としての絵画の力に注目し、西洋画をもって高尚なる文明社会をつくる一助と考えたのであろう。

当時、画塾の設立にあたって、このような趣意書や宣言文を発表する習慣[41]はなかった。しかし、イギリスにおいては、私学校や私塾において、趣意書や声明書を出すのはふつうであったから、国沢もイギリスのやり方を学んだものにちがいない。

また画塾を設立するさいに定めた「規則」もあるが、それをつぎに引いておこう。

一、　授業ハ　毎日午前七時ニ始メ　同十一時ニ終ル（但シ六ノ日休業ノ事）

一、　入学ヲ乞フ者ハ　授業上ニ付　左ノ用器ヲ要ス（鉛筆、画紙、抹紙膠（画用紙にぬる膠の意か？）、画板、紙留鋲、但し右ノ用器持参無之者ハ　当舎（当塾）ニ於テ相当代価ニテ払渡ス）

一、　入学ノ節束修［入学金］一円ヲ納ムベシ（但シ年齢十五才以下ハ　五十銭ヲ減ズ）

一、　毎月謝金一円五十銭ヲ納ムベシ（但シ毎月十五日ヲ以テ納期トス、十五日以後入学者ハ　定額ノ半ヲ減ズ（但シ十五才以下ハ　五十銭ヲ減ズ）

一、　平生（ふだん）常識アリテ　日曜日或ハ一六ノ日而已来学ヲ望ム者ハ　月謝二十

五銭ヲ納ムベシ（但シ束修ハ全額ヲ納ムヲ事）[42]

当時、わが国の洋画といっても、まだ幼稚なものであった。ヨーロッパ絵画の複製写真の〝臨画〟（手本を見て絵を描く）をやるか、[43]あるいは独学で洋画をまなんだ教師につくしかなかった。

この規則書から想像できるのは、彰技堂では主に石膏デッサンや水彩画などを教えていたことである。海外において初めて洋画を学んだ日本人は、国沢が第一号であり、ロンドンから持たらした斬新なる美術上の参考書や参考品は、洋画教育に裨益するところ大であった。

洋行帰りの絵かきとしての国沢の存在は、洋画を学ぼうとする若者たちに大きな魅力であったものか、その門に学ぶ者の数は漸次ふえて行った。

明治八年（一八七五）新橋竹川町に画塾の分舎ができると、本多錦吉郎がその教頭を命じられた。しかし、同十年（一八七七）初春にいたり、国沢は持病の結核のために、ついに起つことができなくなり、本多を「病褥（床）に近づけ、気息奄々（弱って息も絶えだえ）として身後（死んだあと）の事を托し」、同年三月十二日ついに永眠し、青山墓地に葬られた（本多錦吉郎「国沢新九郎君」『洋風美術家小伝』所収、明治41・3）。

彰技堂の経営をたくされた本多の教え方は、懇切であり、塾生に平等の愛を注いだ。[44]絵画論などは西洋の書物（英書）によって講義した。

不幸にして、国沢は帰国して数年後に、わずか三十歳で亡くなるのだが、後事をゆだねられた門人の本多は、彰技堂が麹町から小石川区に移ったことから、改めて「開業願」を東京府知事に宛てて提出した（明治12・8・2）。

それはつぎのようなものである。

私学開業願

一　学校位置　小石川区新小川町二町目八番地
一　校名　彰技堂
一　学科　画学専門
一　教員　一名

右教員履歴

東京府士族（ママ）
本多錦吉郎
二十九年七ヶ月

明治七年十月高知県士族亡国沢新九郎ノ門ニ入リ同氏英国ニ於テ学修セル画学専門ノ教科ヲ受ク同十年三月同氏死去ス依テ其病中嘱託スル処アルヲ以テ爾後其業（じごそのぎょう）ヲ継続ス

教則

一　直線弧線之部
一　物形輪郭（りんかく）之部
一　陰影ヲ設ケタル物形之部
一　景色之部
一　人物之部

右ハ鉛筆ヲ以テ臨本ヲ模写シ諸般ノ形状及ヒ陰影ヲ配布スルノ方法ヲ学バシメ兼テ実物実景ヲ生写セシム

一　水彩画

右水彩画具ヲ以テ臨本ニ依リ或ハ実物実景ヲ模写セシメ以テ諸物形ヲ彩色スルノ方法ヲ得セシム

一　油絵

右水彩画ノ順序ト同シ

一　幾可図法

一　遠近図法

一　人物割合（〝人体比例〟のこと―引用者）幷ニ解剖

一　位置経営論

一　日光陰陽論

一　彩色論

右日々時ヲ定メ原書ヲ訳述講議シ或ハ之ヲ翻訳書トナシ各自ニ閲覧セシメ以テ画学ノ法理ヲ悟ラシム

校則

一　新ニ入学ノ者ハ其管轄庁及ヒ住所等ヲ記シタル証人ノ証書ヲ持参スヘシ

一　脩業時間ハ午前八時ヨリ同十一時二十分迄トス

一　粗暴ノ挙働無用争論ヲ禁ス

一　臨本其他諸画具ヲ紛失シ或ハ破損スル時ハ相当ノ賠金ヲ受ク

一　授業料　毎月金六拾銭

但シ平生常識アリテ日々来学スル能ハザル

者ハ金二十五銭ヲ納メシム
右之通り開業仕度（つかまつりたく）此段奉願度也
明治十二年八月二日　校主兼教員　東京府士族　本多錦吉郎　㊞
東京府知事　楠本正隆殿
（ここに一行あるが判読できない）
小石川区長
内藤恥叟㊞[45]

この「開業願」（明治12）と彰技堂を設立するときに定めた「規則」（明治7）とを比べると、多少異同がみられる。前者においては、教則についてはっきり記されている。先ず学ぶのは、図画の手本をみて形を描き、それに陰をつけること。ついで石膏をデッサンしたり、屋外に出てじっさいの風景や景物を写生することである。

本多錦吉郎が描いた水彩画
（『洋画先覚　本多錦吉郎』昭和9・9）より

つぎに学ぶのは、水彩画や油絵であるが、これはじっさい絵の具を用いて、手本の模写からはじめ、漸次風景などを描いた。また彰技堂では、国沢が将来した西洋画論の紹介書を本多が訳して、生徒に教えたのである。遠近法、人物割合（人体比例）と人体解剖、彩色論などがそれである。

授業は開業当時、午前七時から十一時までの五時間であったが、のちに午前八時から十一時二十分までに改めた。月謝は一円五十銭であったものが、本多が経営を引きついだころ、約半額の六十銭に変わった。これは生徒の数がふえて来たので、安くしたものであろう。

明治十四年（一八八一）ごろから、彰技堂では生徒が激増したため、塾舎の南側に広い教場をつくり、専属のモデルなども雇った。

彰技堂は明治二十八年（一八九五）までつづき、そのご廃校になった。[46] 本多が毎日、英書を

ひらいて西洋人の画法や画論を訳述するようになったのは、明治十三、四年ごろのことであった。

毎日、生徒の絵をなおし、有志には昼食の休時間に英語を教え[47]、夜おそくまで講義の下調べをするのが日課であった。本多がつねに使用していた英和辞典は、――頗(すこぶ)る珍なるもので、木版が純日本紙に印刷された和綴(わとじ)の本であった[48]。

ということだが、これはきっと『英和対訳袖珍辞書』(A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language Printed at Yedo, 1862, 文久二年＝一八六二刊)のことであろう。

ともあれ本多は、西洋絵画と英学とを修練した人であり、授業のないときはかならず美術の原書をひもとき、翻訳をなし、ときどき塾生とともに写生旅行[49]に出かけた。

晩年の本多錦吉郎

当時は、西洋の画論を知るにしても、訳本の少ない時代であったから、語学力のない美術学生は、本多の訳書にたよるしかなかった[50]。

洋画の先覚者としての本多は、不遇な一生を送った。かれは名利にてん淡とした、神仙のような教師であり、生徒たちからたいそう親われた。彰技堂の創業時代(明治七、八年ごろ)、月謝は一円五十銭(ただし十五歳以下は五十銭)、舎費は十銭の計一円六十銭であった。ごくたまに通学したり、貧しい者、塾のために助力する者は、月謝をとくべつに割引きし、半額とか、二十五銭、二十銭とし、それが門人録の姓名のうえに書いてあった。

貧しい者は、その境遇をあわれみ、ときに授業料を免じてやり、あまつさえ描き古した画用紙さえ与えて励ました(白井雨山「先生の人格」『日本美術界第二巻第三号本多錦吉郎号』(大正9・3)。

このように本多には、人情家としての一面があった。大正十年(一九二一)五月二十六日病没した。享年七十二歳であった。品川の東海寺に葬られたが、いま墓石はない。また昭和八年(一九三三)五月、高輪泉岳寺境内に石碑が建立されたがそれもない。

本多錦吉郎が翻訳するにあたって用いた原本は、『芸術についての手引き書――ウィンザーとニュートンのシリーズ物――多数の挿

絵入り』第二巻、一八五六年ロンドン刊（*Winsor and Newton's series of HAND-BOOKS ON ART*, with numerous illustrations, Vol. II, Winsor and Newton, London, 1856）である。

これは恩師の国沢新九郎がイギリスから将来した、三巻三冊のうちの第二巻にあたる。三巻とも扉に、エンピツで "Sinkuro Kunisawa" の書き込みがある。

第二巻の大きさは、17.6 cm × 11.8 cm、厚さは約3.5 cmである。この中にヘンリー・ウォーレンが執筆した「人体の美術解剖学」（*Artistic Anatomy of the human figure*）が収録されている（一頁〜六十四頁まで）。

本多錦吉郎が恩師から引き継いだ英書は、いま国立国会図書館に架蔵されている。ただし元装ではなく、製本し直したものが多い。

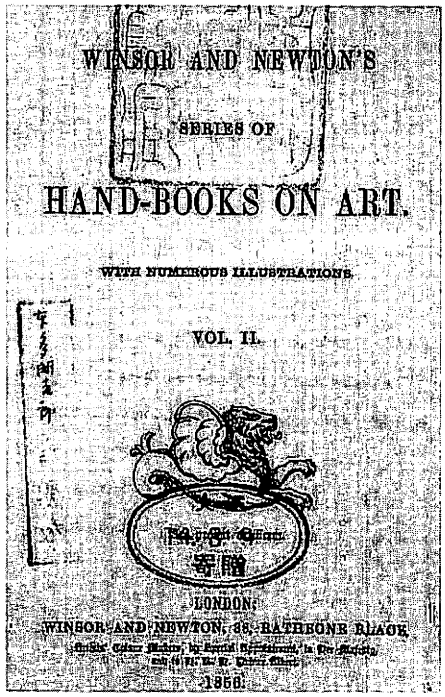
原本（第二巻）の扉をみると、〝本多錦吉郎　寄贈本〟というのと〝大正14・3・9　寄贈〟の印が二つ押されている。錦吉郎が亡くなってから、女婿本多明（あきら）が寄贈した図書二十五冊のうちの一冊である。

書き込みについて。

本多はエンピツ（赤をも含む）を用いて書き入れているが、文字はもう薄くなっており、読みづらい。書き入れがあるページは、七頁、八頁、十頁、十一頁、十四頁、十六頁、十七頁、十八頁、二十頁、四十頁、四十二頁、四十五頁などである。書き入れの主なものは、単語の意味である。

全体から見れば、書き込みは決して多いとはいえない。いちばんそれが多いのは八頁であり、骨格（skeleton）の各専門用語に訳語を書き入れている。

THE　SKELETON



「美術必携　人体解剖編」の原文が収めてある原本
（国立国会図書館蔵）

イ　A.　Os　frontis—the frontal bone.　額骨

ロ　B.　Os　parietale.　額項骨

ハ　C.　Os　temporum　耳胛骨

ニ　D.　Ossa　maxillaria superiora—bones of the upper jaw.　上□□骨（判読不能）

ホ　E.　Maxilla inferior—the lower jaw　（判読不能）

（このあとにつづく単語にも訳がついている）

その他、おもな書き入れには、つぎのようなものがある。

p. 10　cranium（脳蓋骨）
　　cartilage（軟骨）

p. 18　the face［赤色でアンダーラインが引いてある］

p. 20　the mamillary［赤色で×のしるしが付けられている］
　　sterno-costal（胸骨肋関節）
　　the nipple（乳）

p. 40　*the rectus*（直膜筋）

p. 42　*The obliquus descendens*（斜下筋）

p. 43　このページには、人体後面の筋系—上半身の図があり、そこに朱筆で「僧帽筋（トラペナイド）」、「濶脊筋」と書き入れている。

つぎに本多の訳業について少し検討してみよう。明治初期の翻訳物には、稚拙なものが多く、中には豪傑訳、翻案にちかいものも少なくなかった。

が、本多の場合は原文を忠実に訳しているのだろうか。

原著は「序文」(Preface)、「覚書」(Notes)、「美術解剖学序説」(Introductions in Artistic Anatomy) の順で書かれている。本多は「序文」を訳さず、「覚書」から訳筆をとっている。かれの訳技はどのようなものか、一部原文を引いて見てみよう。

NOTES.

The general construction of the human frame is as follows:

The osseous (bony) structure is first overspread, especially at the joints, by a tough covering called periosteum.

On this are placed the different layers of muscles, enclosed in this sheaths, with their various aponeuroses, or semitendinous portions.

The muscles are partly formed of fleshy fibres, taking various directions, according to their requirements, and partly of tendinous or sinewy portions.

The whole is enwrapped by the adipose (*fatty*) membrane, vulgarly called the skin.

Through this pliable and soft but thick clothing, the actions of the muscles are visible, more or less according to their powerful development or otherwise; but it is at all times difficult to defect their exact forms and directions, and it is a vulgar error to display them in exaggeration. The general sweeping lines of the figure are to be first and chiefly considered, the poise and proportion of the skeleton being the ground for this.

美術必携　人体解剖編

総論

人体骨格ノ構造ハ大概次ノ如シ

人体ノ骨格ハ骨膜(パリテストユーム)ト名クル強剛ナル物ヲ以テ全部ヲ包羅シ　殊ニ諸間接ハ包裹スル「(べき)最モ堅固ナリ

右骨膜ノ上層ヲ数種ノ筋ヲ以テ包裹(ほうか)ス（つつむ—引用者）　筋ハ皆鞘(さや)ヲ以テ集束シ　其両端ハ腱(けん)及ヒ腱膜ヲ供ヘ　骨ニ附着スルノ用ヲナス

筋ニ二種アリ　一ハ肉ノ繊維ヨリ組織シ　其位置方向ヲ種々ニ取リ以テ　其運動作用ニ応ス　他ハ種々ノ腱及ヒ神経系ヨリ成レリ
以上筋ノ上層ヲ肥膩（脂肪のことか）セル膜ヲ以テ包裹ス　之ヲ皮膚ト云フ　此柔軟ナル若モ強勁ナル皮膚ハ　動力ノ多寡ニ応シ　内部ノ諸筋ノ運動ヲ外部ニ現ス者ナリ　然レトモ其精細ナル形状ト方向ヲ定ムルハ常ニ難シトス　人物ヲ画クニ　其輪郭ノ線条流麗圓渾ナルハ作家主トシテ注意スヘキ所ニシテ　即チ骨格筋肉ハ是カ主要ノ基礎ナリ

本多訳は、けっしてまずいものではない。訳文の中にむずかしい漢語が使われていて、今日から見るとやや読みづらいが、意味は通じる。

訳文はおおむね正確な印象をうけるが、添削を要すところもある。たとえば、原文の第三節に、and partly of tendinous or sinewy portionsという文章が見られるが、これは「他ハ種々ノ腱及ヒ神経系ヨリ成レリ」と訳されている。この一文は、「筋または腱の部分から成っているものもある」の意であろう。

and it is a vulgar error to display them in exaggeration（そして、よくある間違いは、諸筋の形や方向を誇張して描くことである）は脱落している。またさいごの一行、the poise and proportion of the skeleton being the ground for this（骨格の平衡とつりあいはそのための基礎である）の箇所は、「即チ骨格筋肉ハ是カ主要ノ基礎ナリ」と意訳されている。

そして原文のさいごは、つぎのような文節で終っているのだが、訳文といっしょに引いてみよう。

MUSCLES OF THE INTERIOR EXTREMITIES.
(SEEN AT THE BACK.)

32. Glutaeus maximus.
21. Biceps femoris.
19. Triceps vel adductor femoris.

33. Semimembranosus.
34. Semitendinosus.
22. Gracilis—part of.
23. Sartorius—edge of.
29. Gastrocnemius.

The *soleus*, or lower portion of the calf of the leg, with the gastrocnemius, ends in a strong sinewy portion, called *tendo Achilles*, which attaches itself to the bone of the heel, and forms a marked protuberance.

In drawing the foot, it may be remarked that the same rule obtains with respect to its setting on to the leg as the hand to the fore arm; that is to say, it is not placed immediately or directly under, but somewhat obliquely with, the *tibia* bone; so that the inner ankle is made to project more than the outer.

Nor must it be forgotten that the *tarsal* cluster of bones have here their place. In fact, it should be observed that throughout the whole skeleton, the bones are so arranged with respect to each other that there shall not exist a right angle at their joints; and thus is avoided the chance of violent concussion in sudden movements, as of jumping, striking, or the like. A sinuous or slightly undulating line is thus maintained through the structure, and it is this line which gives the grace and elasticity of appearance so observably beautiful in the human figure.

下肢諸筋　第二十三版
後面ノ部

三十二　大腓腹筋　グリコチコーステアキシムス
二十一　二頭股筋　バイセプスクモリコース

十九　三頭内轉筋
三十三　羊膜様筋　セミメンプラノース
三十四　羊腱状筋　セミテンジノース
二十二　薄股筋　グラシリス　一部
二十三　縫匠筋　サルトリアス　其辺緑
二十九　二頭腓腸筋　ガストロク子シユス

足跗（足の背）筋ハ脛（膝から踝までの、まっすぐな部分）ノ後半部ニアリテ　二頭腓腸筋ト共ニ強緊ナル靭帯ヲ以テ終ル　此靭帯ハ跗骨ニ跗着シ　著シキ突隆ヲナス　足ヲ画クニハ　前膊ト手掌ノ結合ノ如ク　脛ト足蹠ノ結合ヲ能ク注意シ　脛骨ノ位置ト僅ニ斜メニ足蹠キ内踝（内なるくるぶし？）ヲシテ　外踝ヨリ強ク外出セシムヘシ

凡ソ全骨格ヲ通シテ　骨柱相互ノ結合ヲ見ルニ　其間接ニ於テ正角（直角）ヲナスノ部之レナシ　此構造アルカ為メニ吾人カ　跳躍シ又ハ打撃スルカ如キ急遽ノ運動ニ対シ激烈ナル衝撞ヲ免カルナリ　且ツ皮膚上面ハ　全体ヲ通シテ軽淡ナル波動状ノ線ヲ保テリ　是レ人体ハ蕩然美麗ナル外観アリテ　若カモ弾力アル所以ナリ

The *soleus*, or lower portion of the calf of the leg, with the gastrocnemius, ends in a strong sinewy portion, called *tendo Achilles*, which attaches itself to the bone of the heel, and forms a marked protuberance.

この一説は、いまなら「ヒラメ筋、すなわち脚のふくらはぎといった下の部分は、大腿二頭筋とともにアキレス腱と呼ばれる、じょうぶな腱質の部分で終っている。アキレス腱は踵骨にくっついており、著しく突出している」とでも訳せそうだが、

本多訳では、

足跗筋ハ脛ノ後半部ニアリテ　二頭腓腸筋ト共ニ強緊ナル靭帯ヲ以テ終ル　此靭帯ハ跗着シ著シキ突隆ヲナス

となっている。大むね原意を伝えているから、誤訳とはいえない。しかし、当時の古い専門用語がわかっていないと、この一節を読んでも何んのことはわからない。

原文の第二節の訳は、だいたいこれでよいとしても、第三節のNor must it be forgotten that the *tarsal* cluster of bones have here their place.（また忘れてはならない点は、足根骨群は、ここに位置していることである）の一文は、脱落している。

本多訳は、今日から見ると、添削の余地をたぶんに残しているが、当時の訳とすれば、かなり出来のよいものであったと思われる。

明治十年代から四十年代にかけて、東京府下の洋画私塾において、彰技堂以外に美術解剖学を教えたと考えられる所につぎのようなものがある。

[塾主または校長]	[存続期間]	[塾名または学校名、所在地]
高橋　由一	明治6～同17・3	天絵学舎（「天絵社」、「天絵楼」ともいう）（日本橋区浜町一丁目三番地）
本多錦吉郎	明治8～同28	彰技堂（麹町区隼町十二番地［角屋敷］[51]）
藤田　文蔵	明治16～？	彫刻専門美術学校（牛込区牛込二十騎町十五番地）
原田直次郎	明治22～同28	鐘美館

高橋由一（一八二八～九四、明治初期の洋画家）の「天絵学舎」（六年制）の予科で、幾何・遠近法・投影画法といっしょに〝（人体）解剖学〟を教えたのは、明治十二年から十六年にかけてと考えられる。同舎が東京府に提出した「開学願書」（明治12・6）に〝解剖学〟の文字がみられ、のち定型化した開学届を明治十六年五月再度提出するのだが、それには〝人体解剖学〟の文字がみえる。

藤田文蔵（一八六一～？、鳥取士族、彰技堂、工部美術学校にまなぶ、のち女子美術学校［女子美術大学の前身］を創設）の「彫刻

専門美術学校」は、彫刻家養成の唯一の専門学校であり、それだけにひじょうに珍しい。

この学校は、一期を一年とし、四期四年制であった。「彫刻学科課程表」によると、第一期（第一学年）のときに、画学図学と人体解剖学をまなび、第二期では飾物の彫刻、第三期では動植物の彫刻、第四期では人像の彫刻を学習することになっていた。が、じっさい解剖学を教えたものかどうか、資料に欠けるので何ともいえない。

原田直次郎（生没年不詳、東京府平民）の鐘美館（修学年数五ヵ年）は、ひじょうに短命であった。同校の「学課々程表」によると、木炭によるデッサンのほか油絵を教えた。学科としては、幾何学の初歩、写景研究、写影法に加えて、〝人体解剖学〟を教授したようだ。

明治二十年代後半から同四十年代にかけて、武本観谷の「美術彫刻学校」（四谷区舟町十二番地、明治27～同29）、長沼守敬の「明治美術学校」（小石川区表町百九番地、明治27～29）、横山秀麿の「共立美術館」（本郷区湯島新花町九十七番地、明治29～？）、川端玉章の「川端画学校」（小石川区下富坂町十九番地、明治42～大正？）などの美術教育機関があったが、解剖学を教えたものかどうか定かでない。

＊

町中の一私塾が、官立の学校においてまだ行なっていなかった美術解剖学の授業を、まっ先に実践したことは、塾主である本多錦吉郎の見識をしめすものであった。かれは卓越した英語力があったから、先師の将来本のなかから美術教育上ためになるものを順次日本語に訳しながら講述した。その中にたまたま美術解剖学に関するものがあった。本多はどのように授業を進めたものか判然としないが、おそらく訳稿を見ながら、ときに黒板に図などを描いて行なったものであろう。

本多は黒板のまえに立つと、生徒がすっかりわかるまで熱心に教えた。生徒もそれに応え、熱心に聴講し、研究もしたのである。が、中には居眠りをしたり、雲がくれする無欲なものもいた、というから（中村鈴子「思い出」）、当時どのていど解剖学が生徒に理解されたものか明らかでない。おそらく講義は、若者にとってたいくつであったろうし、その内容もよくわからなかった、というのが実情で

はなかろうか。かれの講義は、イギリスの美術家の論著の中味を、ただおうむ返しに伝えたにすぎなかったとしても、黎明期のわが国の美術教育に裨益するところ大であったと思われる。ともあれわが国の美術教育史上、美術解剖学の移植者第一号としての本多の名は、われわれの記憶にとどめられなくてはならない。

注

(1) 青木茂「油絵初学　明治十二年」(『絵』No.158 昭和52・4所収)、一九頁。
(2) 福島成行「本多錦吉郎」(『明治文化』第五巻第十二号所収)、五一頁。
(3) 「彰技堂」とは、〝技(わざ)を世に明らかにする建物〟の意。
(4) 『都史紀要17　東京の各種学校』(東京都公文書館、昭和四十三年二月)、十二頁を参照。
(5) 浦崎永錫『日本近代美術発達史』(東京美術、昭和四十九年七月)、二一頁。
(6) 『藝工部大学校史料』(非売品、芝之門会、昭和六年七月)、一四〇頁。
(7) 本多錦吉郎「裸体画論」(『美術之日本』第四巻第十号所収、大正元年10・15)。
(8) 『画学類纂　第三集』、二五頁。
(9) 石井柏亭「画学類纂と従征画稿」(『学鐙』Vol.50 No.8所収、昭和28・7)、十三頁。
(10) 尾崎尚文「国沢新九郎・本多錦吉郎手沢の洋画技法書」(『参考書誌研究　第十五号、昭和52・10)、三三頁。
(11) 中村鈴子「思ひ出」(『日本美術界第二巻第三号本多錦吉郎号所収、大正9・3)、八七頁。
(12) 上村昌訓「高徳の人」(『日本美術界第二巻第三号所収)、九七頁。
(13) 注(11)の九〇頁。
(14) 『洋画先覚本多錦吉郎』(本多錦吉郎翁建碑会、昭和九年九月)、一頁。
(15) 横山健堂「油画の開拓者　本多錦吉郎翁」(『日本美術界第二巻第三号』所収)、十八頁。
(16) 『広島県史　近代Ⅰ　通史Ⅴ』(広島県、昭和五十五年三月)、五一頁。

(17) 外山卯三郎「エコール・アングレエズの移入者としての国沢新九郎と本多錦吉郎」(『書物展望』第五巻・第八号通巻第五十号所収)、一一四頁。
(18) 注(17)の二八頁。
(19) 注(18)におなじ。
(20) この資料(入社帳三号「入社姓名録　明治四年第三」自明治四年四月至明治五年十二月)は、『慶応義塾入社帳　第一巻』(慶応義塾　福沢研究センター、昭和六十一年三月)の四八頁にみられるし、マイクロフィルム(雄松堂)にも入っている。
(21) 『慶応義塾百年史　上巻』(非売品、慶応義塾、昭和三十三年十一月)、三二六頁。
(22) 注(15)の二八頁。
(23) 注(21)の二八七頁。
(24) 安永梧郎『馬場辰猪』(東京堂、明治三十年四月)、二八頁。
(25) 注(14)の五頁。
(26) 永国淳哉『土佐藩留学生異聞』(土佐出版社、平成元年十月)、八〜九頁を参照。
(27) 注(26)の一七頁。
(28) 注(24)の三七頁。
(29) 松山白洋「国沢新九郎」(『土佐史談』第十八号所収)、五〇頁。
(30) 馬場孤蝶「馬場辰猪自伝」(『改造』1924十二月号所収)、二二二頁。
(31) 注(24)の三七頁。
(32) 注(26)の四五頁。
(33) 注(24)の三八頁。
(34) 注(26)の一二七頁。
(35) 注(26)の一五三頁。
(36) 注(29)の五一頁。
(37) 本多錦吉郎「国沢新九郎君」(『洋風美術家小伝』所収、非売品、報文社、明治四十年三月)、三〜五頁を参照。

(38) 注(29)の五一頁。

(39) 「国沢新九郎略伝」(一八四九～一八七八)(『みづゑ』第一八二要目[昭和9・4])。

(40) 注(5)の二〇～二一頁より引用。なお、国沢新九郎の画塾に掲げられた趣意書は、日本唯一の版画雑誌『エッチング』一〇四号、昭和十六年九月号にも見られる。紹介者の岩橋章山は「加古手帳より発見しました故、移して御一覧に入れます」と述べている。

(41) 外山卯三郎『日本洋画史　第一巻　明治前期』(日貿出版社、昭和五十三年四月)、一四一頁。

(42) 注(5)の二一頁。

(43) 注(41)におなじ。

(44) 丸山晩霞「恩師　本多錦吉郎」(『日本美術界第二巻第三号』所収。

(45) この史料は、「明治十二年七月　私学書類回議録　第六題　学務課」(東京都公文書館蔵、マイクロフィルムの請求番号は 610 B3 B)の中にある。注(10)の尾崎論文にも引用されている。

(46) 注(4)の二八頁。

(47) 注(11)の九二頁。

(48) 注(44)の五四頁。

(49) 注(15)の三八頁。

(50) 中村不折「本多錦吉郎に就て」(『日本美術界第二巻第三号』)、六三頁。

(51) 岩橋章山は、この〝角屋敷〟のことをつぎのように語っている。

これは明治十年の頃かと思考致します。場所は麹町隼町の角屋敷でした。僕はまだ少年の頃で、時々永田町の自邸から絵を見に行ったものです。此れは洋画塾の最初でしたらう、新九郎先生は此塾を開いて再三年後に死去され、お弟子の内にて宮本某(本多錦吉郎の誤り?――引用者)といふ人が、其跡を引受け神田辺に移転して、学校用の絵手本などを出版したと思ひます(「国沢新九郎の画塾に掲げたる趣意書」『エッチング』一〇四号、九月号所収)。

［資料］

つぎに掲げるものは、本多錦吉郎が小石川区新小川町の彰技堂において、明治十三年（一八八〇）ヘンリー・ウォーレンの「人体の美術解剖学」（*Artistic Anatomy of the Human Figure*）を講述し、それを明治二十三年（一八九〇）九月から同二十四年二月にかけて、『画学類纂』（第一集～九集をもって刊行をおえる。六集六冊のものもある）に六回にわたって分載したものである。

本多が「美術必携　人体解剖編」と題した訳講は、分冊であるのでまとめて閲することが容易でないため、資料としてその全文を掲げることにする。掲載にあたり適宜（　）内に注を入れ、また旧字体はいまの漢字に改め、またむずかしい漢字にはルビをふったことをお断りしておく。

画学類纂
緒言（はしがき）

画学ノ書　世間行ハル、モノ甚ダ多シ　然レトモ本邦及ビ支那ノ画論ノミニシテ　欧米ノ画ヲ説ク者ハ甚タ乏シ　余多年欧州ノ画法ヲ学ヒ　揮写（画をかく）ノ余暇　諸書ニ就テ　其理論及ヒ画法ヲ攻窮（究の誤りか）シ　翻訳筆記スル者積テ数十部ニ至ル

頃日盛暑（このごろの暑さ）ニ際シ　古書ヲ曬晒ス（さらす）　偶々友人来リ画学ノ筆記ヲ閲覧シ曰ク　方今（いま）内外美術ノ事ハ世ノ一問題トナリ　論客ハ之ヲ喋々シ（盛んにしゃべる）技術家ハ頻ニ其精巧ヲ競フ　然レトモ欧州美術ニ係ルノ書甚ダ乏シ　故ニ其依ル処ナクシテ　走ラニ臆説空談ニ墮ルヲ免カレス　今此筆記ヲ見ルニ　画事ヲ詳論スルニ委曲（くわしさ）尽サヽルナシ　誠ニ磨滅スヘカラザル良書ナリ

豈ニ之ヲ書筐底裡（書物を入れる箱の底）ニ埋没シ置ク者ナランヤ　何ソ世ニ公ニシテ同学友ニ啓示セサルヤ

且ツ此書ノ如キ独リ画家ノ専有ノミニアラス　広ク好事家ノ間ニ別チ　以テ其嗜好ノ資ニ当ツベキナリト

余曰ク既ニ其意ナキニアラス　只斯道（このみち）ノ一助タルニ足ラサルヲ疑フノミ　且ツ余ヤ赤貧印行（出版）ノ資ナキヲ以テ

遂ニ今ニ至ルト　友人曰ク其同学ヲ益スルハ論ナシ
其印行ノ如キハ　体裁装貼（表装）ノ費ヲ省カバ何ゾ多費ヲ要セン　須ラク急ニ活版ニ附スベシト　遂ニ印行ノ企図ヲナシ　名ケテ画学類纂ト題ス
要スルニ画学一切ノヲ分類シ　編纂スル厭者ナリ
一　記載ノ主旨単ニ一種ニ止ラス　或ハ理ヲ論スルアリ　又ハ法ヲ説クアリ　畢竟閲覧ノ際　一部ニ偏スルノ煩ヲ事ヒ　講義録ノ体ニ倣ヒ　諸科ヲ分載スル「トセリ
然レトモ常ニ一定ノ制限ヲ設ケス　適意編纂スルカ故ニ　高遠ノ者（考えのすぐれた人）卑近ノ者（ありふれた人）長文短文ノ斟酌ナク　或ハ三四科ヲ分載シ　或ハ一二科ニ止マルアリ　特ニ次ヲ（順序）追ヒ編ヲ続キ　遂ニ完備セン「ヲ期ス
一　所蔵ノ筆記ハ　冊数僅少（わずか）ナラス　之ヲ一時ニ印行スルハ　著者固ヨリ　費途（金銭）ニ堪ヘス　故ニ前述ノ如ク学科ヲ分載シ　漸次ニ発兌（印刷して売る）セントス
毎編次続スベキ主旨ハ　植字及ヒ紙面ヲ斟酌シ　発兌数次ニ渉ル　後チ一科ノ主旨ハ　別テ巻ヲ改ムルノ便トナスヘシ

明治廿三年　初秋　彰技堂主人識

本集ハ初刊ノ事ナレバ　各科共ニ緒言総論ノミニシテ　読者ニ益スル所少ナシ　次集ニ至レバ　主眼ノ論説多ク　図画モ従テ増加スベシ
読者一斑（全体の一部）ヲ見テ　全豹（全体）ヲ評スル勿レ
逐次刊行ス可キ書目及ヒ要旨

（中略）

美術必携　人体解剖編

絵画　彫刻術ニ必要ナル　人体解剖ヲ親切簡明ニ説示ス

（中略）

美術必携　人体解剖編

緒言

此編ノ主旨ハ　人物ヲ作ルヘキ技術上ニ要用（必要）ナル者ヲ挙ケ　以テ作家ニ裨補（おぎなう）セン「ヲ期ス　其説明ハ簡単ヲ旨トシ　理解シ易カラシメン「ヲ欲ス

書中挿入スル図画ノ諸骨部ノ特徴ハ　(イ)(ロ)(ハ)ヲ用ヒ　筋肉ニハ数字ヲ記ス　且ツ同種ノ者ヲ再出スル時ハ　又従テ同様ナル字ト数トヲ用ユヘシ

図中陰影ヲ顕ス線ノ方向ハ　筋肉ノ繊維ニ従フ者ナリ　画家　彫刻家ノ殊ニ注意スル処ノ　皮胃上ノ皺襞（しわ）ハ　皆之レニ基ケリ

訳者曰ク　凡ソ人体ノ骨格筋肉ハ　画家彫刻家ノ　主トシテ知ラサル可ラサル要項ナリ　畢竟（つまり）人体ノ構造ハ　造化至妙（絶妙）ノ奇工ニシテ　天地間万像ノ最乗（上の誤りか）ナル者ナリ　故ニ　欧米ニ於テ　美術上ノ工技ヲ講習スルハ　必ス人体ヲ基本トシ　之ニ由テ　天然ノ美趣ヲ弁明シ　画ニ於テハ　筆法ヲ研究シ　彫刻ニ於テハ　刀法ヲ練習ス

本邦古人　骨格ヲ論スル者アリト雖トモ　未タ欧米ノ精緻ナルニ及ハズ　故ニ其人物ノ形状ハ　醜陋（みにくい）甚タシキ者多シ

今後ノ作家宜ク猛省（深く反省する）スヘキナリ

美術必携

人体解剖編

総論

人体骨格ノ構造ハ　大概次ノ如シ

人体ノ骨格ハ　骨膜ト名クル　強剛ナル物ヲ以テ全部ヲ包羅シ（ひっくるめる）　殊ニ諸関接ハ　包裹スル（つつむ）「最モ堅固ナリ

右骨膜ノ上層ヲ　数種ノ筋ヲ以テ包裹ス筋ハ　皆筋鞘ヲ以テ集束シ　其両端ハ　腱及ヒ腱膜ヲ供ヘ　骨ニ附着スルノ用ヲナス

筋ニ二種アリ　一ハ肉ノ繊維ヨリ組織シ其位置方向ヲ　種々ニ取リ　以テ其運動作用ニ応ス　他ハ種々ノ腱及ヒ神経系ヨリ成レリ

以上筋ノ上層ヲ肥膩セル（脂肪の多い）膜ヲ以テ包裹す　之ヲ皮膚ト云フ　此柔軟ナル若モ強勁ナル皮膚ハ　働力ノ多寡ニ応シ　内部ノ諸筋ノ運動ヲ　外部ニ現ス者ナリ　然レトモ其精細ナル形状ト方向ヲ定ムルハ　常ニ難シトス

人物ヲ画クニ　其輪郭ノ線條流麗圓渾ナルハ　作家主トシテ　注意スヘキ所ニシテ　即チ骨格筋肉ハ　是カ主要ノ基礎ナリ

凡ソ外貌ノ華美ヲ仮装偽作スルハ　初学ノ為メニ大碍碍（さまたげ）タリ　宜シク内部ヨリ攻究スヘキナリ　死体ヲ臨摹シテ　以テ活人（生きている人）ヲ作ラント欲スルハ　誤謬是ヨリ大ナルハナシ

古製ノ彫像ハ　学者ノ好模本ナリ　学者之レニ依テ　裨益ヲ得　外ニ人体解剖ヲ弁へ　又照影法ヲ学ヒ　物状ノ変化スル実況ヲ熟知セハ　人物ヲ画クノ難事ハ　適宜練習ノ效ヲ以テ打チ勝ツ「ヲ得シ

第一版図解

骨格

(イ)　額骨　フロンタルボーン

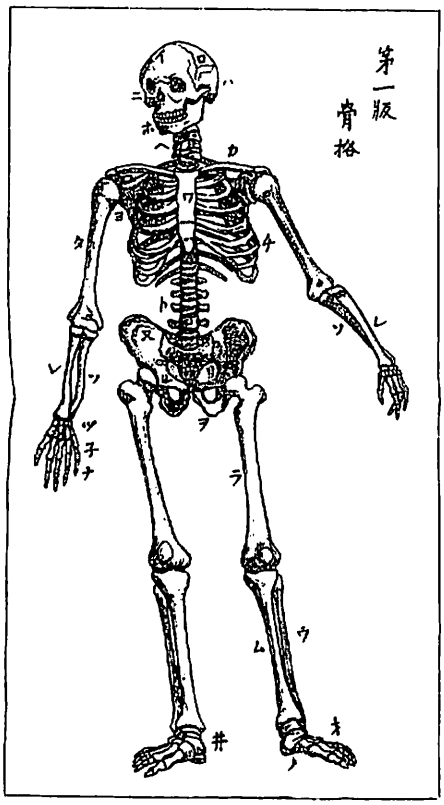
(ロ) 顱頂骨（頭蓋骨）　ヲスパリテール
(ハ) 顳顬骨（こめかみ）　ヲステンポラール
(ニ) 上顎骨　オスサマキシルラリア　ソペリヲリヤ
(ホ) 下顎骨　マキシルラインフェリヨル
(ヘ) 頸椎七片　セブンベルテブラ
(ト) 脊椎柱　ヴエルテブラコロムン
(チ) 肋骨　真肋骨七対　仮肋骨五対　ウリブ
(リ) 薦骨　サクロム
(ヌ) 腸骨　ヲスイリユム
(ル) 恥骨　ヲスピユビス
(ヲ) 坐骨　ヲスイスチユーム
(ワ) 胸骨　ステルノン
(カ) 鎖骨　カラヴヰクル
(ヨ) 肩甲骨　スカピユラ
(タ) 上臂骨　ヒュメラス
(レ) 撓骨　ラジアス
(ソ) 尺骨　ヲルナ
(ツ) 腕骨　ウイストボーン
(子) 掌骨　メタカルプス
(ナ) 指骨　ボーン、ヲフ、ゼ、ヒンゲル

(ラ) 大腿骨　ヘミユールー
(ム) 小腿骨　チビア
(ウ) 輔腿骨　ヒブラ
(キ) 跗骨　タルサス
(ノ) 蹠骨　メタタルサス
(オ) 足趾骨　ボーン、ヲフ、ゼ、トース

サイ　ボーン

骨格総論

骨格ハ　恰モ人体ヲ構造スル梁柱ノ如ク　之ニ由テ　其上層ノ者ヲ支持ス　総テ骨格ハ　動物ノ大小強弱智愚ノ預ル所ニシテ　其質ハ堅硬ナリ　其機械的ノ力ハ　外物ヲ保持シ之ヲ縦横ニ支ヘ　又ハ外圍トナリ　木挺トナル



而テ（すなわち）骨格ハ　総数二百ノ骨片ヨリ組整スル者ナリ　今此各骨ヲ一々明瞭ニ解クハ　斯ノ小冊子ノ切要トスル所ニアラス　又此数骨ヲ一組一対ニ組整シテ数フル時ハ　其数著シク減スヘシ

骨ノ形状種々アリ　其切断面ヨリ見レハ　三角形ノ者アリ長方形ノ者アリ　圓ナル者（円いもの）アリ

又其用ニ従ヒ　此等数種ノ形ヲ一括スル者アリ

而テ茲ニ其詳細ヲ尽クスハ繁雑ヲ覚フノミナラス　此編ノ如キニ於テハ　無用ニ属スルヲ以テ　解剖家ノ単一ナル区別ニ従

ヒ　骨形ヲ長骨、短骨、扁平骨ノ三種トナス

全体ノ骨格ヲ分ケテ　軀幹（体のほねぐみ）及ヒ肢骨トス

軀幹ハ頭顱骨、脊椎柱、肋骨、胸骨、及ヒ腸骨ヨリ成レリ

肢骨ハ上肢下肢ノ別アリ　手腕脛足ノ骨是ナリ

頭顱骨ハ単ニ分ケテ　頭蓋骨ト顔面骨トス　猶詳細ハ後章ニ説明セン

脊椎柱ヲ構造スルノ骨数廿四アリ　頸椎七片　脊椎十二片　腰椎五片ナリ　毎片ノ間ニ　繊維軟骨ヲ狭ミ　相層疊繋鏈シテ成リ

其丈ケ二ヒート（フィート）四インチヨリ　二ヒート八インチニ及フ　但シ薦骨及ヒ尾骶骨ハ　除テ算セス

脊椎柱ヲ側面ヨリ見レハ　全形彎曲セリ（まがる）　即チ頸椎部ハ　前方ニ凸隆シ　脊椎部ハ　大ニ後方ニ向テ彎曲シ　腰椎部ニ至リ　再ヒ前方ニ向テ挺出ス（のびる）

薦骨ニ近ツク時ハ　又後方ニ向フ　之ヲ前後ヨリ正対シテ見ル時ハ　稍々（しだいに）左方ニ屈曲（折れまがる）セリ　此偏倚スル以所（所以）ハ　今爰ニ詳明セス

椎骨ハ　毎片横突起（トランスヴェルスプロセツス）ヲ供へ　肋骨ト関節ヲナス　又関節突起ヲ供へ　椎骨ヲ相連合スルノ用ニ充ツ　其最モ重要ニシテ　殊ニ画者（絵かき）着目スヘキハ　棘状突起ニシテ　椎骨ノ用ニ応シ　種々ノ方向ニ突起セリ　而テ頸椎ノ七片及ヒ腰椎ノ五片ニ於ケル突起ハ　又殊ニ注意シ易クシテ　腰椎ニ於ケル者ハ　猶分明（あきらか）ナリ

薦骨ハ脊椎柱ノ基礎ニシテ　正ニ五片ノ椎骨ヨリ生合シテ　人体ノ生長ニ従ヒ　一骨ト成レルモノナリ

脊椎柱ハ　各椎（せぼね）ノ間ニ椎間軟骨ヲ備ヘ　其質弾力アリテ　軟滑滋潤（なめらかなしめり）ナリ　以テ脊柱ノ運動ヲ自在ニシ　又全脊椎ヲ通過スル処ノ脊髄ヲ保護スルノ用ヲナス　身体中最モ夥多（あまた）ノ運動ヲ営ムハ　頸椎腰椎ニアリ　又体勢ノ直立スルト彎曲スルハ　脊椎柱ノ屈曲ニ依ルナリ

脊椎柱ヨリ肋骨ヲ起ス椎骨ノ両側ニ　小細滑沢ナル骨面アリ　爰ニ肋骨ト椎骨ヲ連合ス肋骨ハ　其一部ハ　骨ニシテ　他部ハ軟骨ヨリ成リ　左右各十二枚アリ　上方七枚ハ　胸骨ト接合シ　真肋骨ト称シ　下方ノ五枚ハ　胸骨ト接合セス　名ケテ仮肋骨ト云フ　肋骨

ノ形ハ　湾曲シテ　下方ニ向フ骨格ノ図ヲ参観スヘシ

図上肋骨ノ一連ハ　筋ヲ以テ包裹セル活人体ノ中ニ見ルモノトハ　反対セル形ヲ示スト雖トモ　猶軀幹中　此重要ノ部ノ真形ハ　弁明シ得ルニ足ラン

胸骨ハ　胸部前面ノ中位ニアリテ　真肋骨七片ヲ爰ニ連結ス　人幼稚ノ間ハ　此骨七片ヨリ組整ス　壮年（働きざかりのころ）ニ及ヒテ　堅硬ナル一片ト化ス　但シ其初生ノ別ハ　辺縁ニ顕レタル変化ニ依テ　弁セラルヘシ

胸骨ハ大概前方ニ向ヒ　下方ニ傾ク　其角度ハ　人種気候及ヒ人々ノ職業ト習慣トニ依テ差異アリト雖トモ　大概二十度ヨリ　二十五度ノ間ニアリ　此度ハ男子ニ於ケルヨリ　女子ニ於ケルヲ大ナリトス　又之レニ相応シテ　女子ノ頸椎部ハ　男子ヨリ直立ナリ

胸骨ノ一端ハ　鎖骨ノ一対ニ接合シ　鎖骨ノ方向ハ　胸骨端ニ於テ　稍ヤ外方ヘ湾凸シ　後チ内方ヘ湾凹ス　此凸凹ハ　男子ニ著シク　女子ニ於テハ　殆ント真直ナリ

鎖骨ノ胸骨ト結接スル中間ニ　細小ナル窪アリ　咽喉窩ト名ク

此凹窪部ハ　全体ノ平衡ヲ整頓スルニ　至要（きわめて大切）ナル点ナリ　鎖骨ノ外端ハ　肩胛骨ニ於ケル　肩頂突起ト　烏喙（からすのくちばし）突起トヲ以テ　肩胛骨ト連結ス　猶肩及ヒ腕ヲ説クニ及ヒ　其詳細ヲ挙クヘシ

骨盤ハ　堅硬ナル大骨ノ数片ヨリ組整セル骨塊ニシテ　人体ノ中央部ヲ占ム　其形ノ内ニテ　更ニ著ルシキハ　腸骨ニシテ　其両側ニハ　髖骨（こしぼね）ノ一大突起ヲ形成ス　腸骨ハ　其形深キ水盤ノ如ク　広ク凹窪セル壁ヲ成シ　前方及ヒ下方ニ向テ　強キ雞冠（鶏のとさか）突起ヲナス

又後方ヘ沿フテ　横回シ強固ナル穹窿（弓なりに曲った）縁及ヒ棘ヲ供ヘ　強剛ナル筋ノ依附スル（たよりつく）所トナリ　以テ全骨盤ヲ支持ス　他ハ皆ナ　図ニ就テ　其形ト位置ヲ弁知スヘシ　惣テ（すべて）骨盤ハ　男子ヨリ　女子ニ於テ広大ナリ　且ツ形モ亦稍ヤ異ナリ　其両腸骨ノ上縁　即チ両腸骨櫛ノ間ノ　突起モ稍ヤ少ナシ

腕ハ臂ト手ヲ共ニシ　解剖家ハ之ヲ上支トナス　其上方ハ　健強ナル靭帯ヲ以テ　鎖骨及ヒ肩胛骨ニ連結セリ

臂（うで）ノ上部ヲ　上臂骨ト名ク　骨形長クシテ　稍ヤ螺旋状ヲナシ　上端ニハ　大小ノ結節アリテ　団円（まる）ヲナシ　軟骨

ヲ以テ　被覆セラレ　肩胛骨ノ淺窩ニ連結ス　此淺窩ハ　即チ関節窩ト名ケ　上臂骨頭ヲ挿入スヘキ窪ナリ　且ツ骨頭ヲ受クル為メニ軟骨ヲ以テ　其内面ヲ覆ヘリ

上臂骨ノ下端ハ　各側ニ拡張シ　一種美巧ノ連結ニ依リテ　前臂骨ノ尺骨ト撓骨トヲ結接スルニ適ス　其尺骨撓骨ハ　互ニ旋回シ屈伸轉回更ニ自在ナリ

尺撓二骨ノ下端ニ　数片ノ小骨片ヨリ成レル腕骨ヲ結合シ　次テ掌骨ヲ連接シ　又之レニ指骨ヲ連繋ス

下肢骨ハ　人体中其位置ニ依リ　此名称ヲ受ケ　左右共ニ同数同式ヲ以テ組整セリ　其上部ノ骨ヲ　大腿骨或ハ腸骨ト名ケ　上臂骨ト同シク　骨形長クシテ　稍ヤ螺旋状ヲナス

其頭ハ団円ニシテ　関節窩　即チ髀臼ニ鉗入ス

其他大腿骨ノ頭及ヒ脛（すね）ニ於ケル　結節状突起ハ　上臂骨ニ於ケルモノト畧（あらまし）相同シ　其最重要ナルモノヲ大廻轉ト名ケ　堅強ナル数條ノ筋ヲ繋着シ（つなぐ）以テ強力ノ運動ヲ営ム

大腿骨ノ下端ハ　二個ノ大結節ヲナシ　之ヲ髁（ももの骨）ト称ス　即チ脛骨ノ二大骨柱ナル　小腿骨及ヒ輔腿骨ヲ連結スヘキ蝶鉸ヲ爰ニ供ヘリ

脛骨ノ下端ニハ　恰モ前臂骨ト指骨ノ間ニ　腕骨掌骨ヲ挾ムカ如ク　脛骨ト足趾骨ノ間ニ　内踝（踝は足首突起の意）外踝ノ突起ヲ以テ跗骨蹠骨ヲ挾ミ　足部ノ全骨ヲ連繋セリ

上下肢骨中　毎骨ノ形状ト運用トハ　其構造組整ノ部ト共ニ　其適応ノ場ニ於テ詳明セン　且ツ男女ノ間ノ差異ヲモ亦示サント欲ス要スルニ此一章中ニハ　活人ヲ画ク時ノ如ク　其比列ト平衡ヲ考ヘ　以テ骨格全体ノ次第ヲ記セハ足レリトス　則チ人体直立シテ四支関節トノ方向其姿勢ニ応シ　斉整（きちんと整える）具備ノ有様ヲ知ラシムルニアリ

頭部及ヒ頸部（くび）

解剖家　頭ヲ分ケテ　頭蓋骨及ヒ顔面骨ノ二区トス　然レトモ　此編ニ於テハ　頭部ナル一名ノ下ニ　其諸部ヲ解クヲ便ナリトス

畢竟　顔面ハ　額骨ト直ニ接合セルヲ以テ　額ハ顔面ヲ形成スルト思考セラルレハナリ

頭蓋骨ハ　頭部ノ最上部ニ位シ　其頂上ヲ組整ス　若シ顴骨（ほおぼね）ト下腭骨トヲ　共ニ除却セハ　正ニ之レ一個骨タルヲ知ルヘシ　最モ耳ト鼻ノ下部トハ　供ハラサルヘシ

茲ニ頭蓋骨ヲ解クニ　欧州人ヲ基本トシテ　其正側二面ノ画ヲ掲ケ　各種骨片ノ名称ヲ記スノ便トス　但シ毎骨ハ鋸歯状骨縫ト名クル嵌錯セル接合アリ

(イ)　額骨　ヲス、フロンチス
(ロ)　顱頂骨　ヲス、パリーテール
(ハ)　顳顬骨　ヲス、テムポルム
(ニ)　観骨即チ頰骨　ヲス、マラー
(ホ)　上腭骨　マキシルラ、ソツペルヲル
(ヘ)　下腭骨
(ト)　後頭骨

蝴蝶骨及ヒ篩骨ハ　深ク内部ニアルヲ以テ　画用ニ於テ要用ナラサレハ　爰ニ詳解セス

額ハ人種ノ異ナルト　又同種中　各人ニ於テ異ル所　甚タ大ナリ　欧州人ニ於テハ　鼻頭ヨリ髪際迄ノ額ノ長サヲ　鼻ノ惣丈ケト同ジモノトシ　人物ノ割合ヲ定ムルノ規矩（標準）トス

頭蓋骨ノ形状ハ　其外被ノ筋及ヒ膜ノ薄キカ為メ　其真形ヲ変スル「ナシ　但シ顔面骨ニ於テハ　全ク然ラス而テ　凡ソ人体ノ筋肉中　顔面ノ諸筋ハ　頗ル画工ノ意ヲ労スルモノニシテ　其差異ヲ見出ス「甚タ難シトス

頭部ノ諸筋ハ　皆ナ筋鞘ノ内ニ包裹セラレ　錯雑セル綱状ノ筋條ヨリ成レリ　此諸筋ハ　骨部ニ附着スルノ外　又腱膜及ビ腱ニ連結シ或ハ皮ニ粘附シテ　其動作ハ　其形状ニ相応セス　其繊維トハ異ナル方向ニ皺襞ヲ生ス

第三版

凡ソ面部ノ諸筋ハ　種々ノ情念ヲ現露シ　面貌ノ変化ヲ為スモノナレハ　殊ニ画者（絵かき）ノ主要トスヘキ部ナリ故ニ　画上ノ形状組織ハ　殊ニ明瞭ナラン「ヲ期ス

顔面諸筋ノ名称ト　其功用ヲ説クニ先チ　骨ノ著シキ突起ヲ知ルヲ宜シトス　要スルニ是等ノ突起ハ　面貌ノ趣ニ関係スル「甚タ大ナレハナリ

後頭骨ノ下部ニ於ケル突起ハ　人々異ナル処アレド　殊ニ禿頭ノ人ニ就テ見レハ　突起著シク知ラサルヘシ　之ヲ外後結節ト云フ

又耳後ニ於ケル顳顬骨ノ乳頭突起ヲ著シ一部トス

此突起ハ頸ニ属スル堅強ナル筋ノ附着スル処ナリ　又眼ノ上辺ニハ　弓状ノ上眼窠（窠はあなの意）縁ノ突起アリ　其突起ノ種　異ナルト　其形ト　其左右外方ノ顳顬線ノ突起ハ　人々ノ額ノ趣ヲ異ナラシム　此他觀骨ニ　他少ノ突起アリ

下腭骨ノ左右ノ角隅ニ於ケル　冠状突起ノ如キモ　面貌差異ヲ与フルモノナリ

第四版

面部ノ諸筋ハ　下ニ述フルモノヲ以テ切要トシ　且ツ最モ理会（理解）シ易キモノトス　其諸筋ノ位置ハ　文中巨細ニ説明スルヲ以テ図中別ニ符号等ヲ記サス

前頭筋ハ　眼瞼（まぶた）輪匝節ノ上縁ノ内方半ノ所ヨリ起リ　斜メニ上方ニ昇リ　前頭骨ノ上ニ至リ腱膜ニ変シ

頭蓋帽状腱膜ニ附着ス

此腱膜ハ　頭蓋ヲ全ク被覆シ　惣ノ額骨ノ諸筋ト結着セリ

前頭筋ハ　其運動ヲ以テ　額ニ皺襞ヲ生シ　従ヒテ眼及ヒ眉ノ内部ノ角偶ヲ挙上シ（上にひっぱる）顔面ニ疼痛（ずきずきしたいたみ）ノ情ヲ現露ス

顳顬筋ハ　顱頂骨及ヒ前頭骨ヨリ生シ　観骨弓ノ下ヲ過キ　下腭骨ノ冠状突起ニ至リ　堅強ナル腱ニテ附着セリ　且ツ歯ヲ嚙マシムル為メ　上腭ニ対シ　上下ノ運動ヲ営ム

咀嚼筋ハ　上腭骨及ヒ頬骨ノ下前部ヨリ起始ス　此筋ハ強キ繊維ノ集合セルモノニシテ顴骨（ほほぼね）突起ノ下部及ヒ内部ニ於テ広ク位置ヲ点顴　下テ下腭ノ外側ニ沿ヒ　冠状突起ヨリ　口ノ角隅ノ間ニ附着セリ

其作用ハ　顳顬ト結合シテ運動ス　咀嚼筋ハ　顳顬筋ノ補助ニ依リテ　剛顬ナル筋力ル生シ　斯ルトキハ　其形平扁ナル面ヲ失セ更ニ膨脹スヘシ　実ニ右ニ条ノ筋ハ　其働ヲ相互ニシ　同時ニ　一ハ膨脹シ　一ハ収縮ス

且ツ顳顬筋ノ動脈ハ　外面ニ著シク現ルヘシ　右ノ如キ運動ハ　精神ト身体ニ於テ　非常ニ勤勉スル「アルカ　或ハ猛烈ナル疼痛及ヒ感動アル時ニ起ルモノナリ

眼瞼（まぶた）輪匝筋ハ　眼窩縁ノ内外偶ニ起始シ　眼窩（眼球のはいっている穴）ヲ周環（めぐる）スル　筋ノ繊維ノ集合ナリ眼ノ開閉ハ　此筋ノ働ニシテ　其内外偶ノ外ハ　骨ニ附着セスシテ　其上面ニ安頓（所をえる）スルモノトス

鼻翼上唇挙筋ハ　上腭骨ノ鼻突起ニ於ケル二重ノ腱膜ヲ以テ起始シ　下リテ其繊維ヲ開散シ　以テ鼻翼及ヒ上唇ニ至リ附着ス　其作用ハ　其固有ノ働ノ外他筋力ノ結合ニヨリ　頬ト鼻孔ノ間ノ溝線ヲ生ス

鼻厭縮筋ハ　鼻孔根ヨリ起リ　先ツ鼻翼上唇挙筋ト連結シ　後チ薄キ膜ト変

シ　全ク鼻脊ヲ被ヒ　前頭骨ニ至リテ終ル　其作用ハ　物ヲ嗅クニ当リ　鼻孔ヲ圧閉シ　又鼻ニ皺襞ヲ生スルノ力アリ

上唇挙上筋ハ　眼窩縁ノ下ニ起リ　斜メニ下リテ上唇ニ附着シ　以テ上唇ヲ上方及ヒ外方ヘ牽引（ひく）スルノ作用アリ　此筋ハ又笑ヲ催シ　或ハ他ノ感動ヲ起ス時　口角挙筋ト名クルモノト結合シテ　頰ニ膨脹ヲ生ス

観骨筋ハ　上唇挙上筋ト結合セル運動ヲナシ　観骨ヨリ起テ相平行シ　下テ口圏輪状筋ト相交錯ス

口ノ働ヲ作用スルノ諸筋ノ内　右ニ述フルモノ多クハ　皆口辺ヲ上方ヘ牽引スルノ力アリ　其下方ヘ牽引スルノ力ハ　口角下制ニシテ　此筋ハ下腭ノ下縁ヨリ広ク生シ　上部ニ進ンテ　狭少トナリ　三角柱筋ノ名ヲ受ケ　上唇ノ角偶ヲ圏撓シテ　口ノ角偶ヲ下方ニ牽引スルノ力アリ

口ヲ閉塞スルハ　口圏輪状筋ノ働ニテ　其用ハ上下ノ唇ヲ密接シ　口ヲ閉ツルニ至要ナリ　此筋ハ　其繊維中ニ他ノ近接ノ諸筋ヲ交錯スルヲ以テ　一区ノ筋トスルニハ　少シク疑ヒヲ入ル、所アリ

然レトモ　種々ノ働作中ニ　其一種固有ノ作用ヲ見ル事アリ　甚タシキ苦痛ヲ覚ヘ　或ハ深ク心思（こころ）ヲ煩ハス時ハ　上下ノ唇互ニ密閉シ　且ツ歯ニ密着スルカ如キ　即チ其固有ノ働ト云フヘシ　又笑フトキハ下圧ノ働アリテ　口辺ノ筋　他トハ更ニ其作用相逆フ所アリ

頰筋ハ　又喇叭筋ノ名アリテ　喇叭及ヒ他ノ音器ヲ鳴ラス後チ　時口中ニ　空気ヲ多ク貯ヘ　一頓ニ（にわかに）排除スルノ働キヲナス　凡ソ面部ノ諸筋ハ　心意爽快ナレハ　開散スルカ如クナレドモ　強烈ナル感動ヲ起ス時ハ　面ノ中央ヘ集合収縮スルモノナリ

是レ其大体ノ作用ニシテ　殊ニ注意スヘキ要点ナリトス

頸部諸筋

頸部ノ諸筋ハ　多分頭部面部ノ筋ト連結セリ　依テ前図ニ併セ掲ク

咽喉気管ノ位置ハ　人々能ク知ラル、所ナレハ　別ニ説明ヲ要セス

凡ソ頭部ノ運動ハ　大別シテ二種トス　即チ前方ヘ屈曲スルモノト　回転スルモノ是ナリ

此両運動ハ　重ニ顕部ノ二個骨ニヨルモノニシテ　其前方ヘ屈曲スルハ　第一頸椎ト　頭顱ノ結接スル所ニ起ル　此第一頸椎ハ　頭顱ヲ戴クヲ以テアタラス（頭ニ地球ヲ戴ク神人ノ名）ト名ク回転運動ハ　右ノアタラス骨ト　第二頸椎片ノ歯状突起ノ結合部ニ起ル　此歯状突起ハ基軸ヲナシアタラス骨ノ凹窪面ニ挿入シ　以テ回転ノ用ヲナス

左右ノ肩ヘ屈曲スル運動ハ　円ノ四分一ヲ限トス　此他ノ方向ノ屈曲ハ　右ノ二骨片ト　他ノ頸椎ノ五片ノ結合ヨリ起ルモノナリ

頸部ハ　下ニ述ル所ノ諸筋ヨリ成リ　皆ナ頸椎ヲ圍繞シ　以テ種々ノ運動ヲ営ム　且ツ其諸筋ハ　各一対ヲナス

胸鎖乳頭筋ハ　其位置及ヒ幅員（面積）ヨリシテ　筋力甚タ強シ　其前面ノ縁ハ円ク凸隆シ　其測方ハ　稍ヤ偏平ニシテ窪アリ

其附着スル所ハ　鎖骨及ヒ胸骨ノ上前面部ニアリテ　斜ニ上テ後頭骨及ヒ顳顬骨ニ至リ　其繊維　稍ヤ旋回シテ　耳後ノ乳頭突軌ニ附着セリ

此筋ハ　頸ノ運動ヲ補助シ　頭ヲ前方ニ傾タレハ　一方ニハ皺ヲ生シ　他方ニワ伸張シテ　胸骨ニ結合セル腱部強ク　外面ニ顕ハルヘシ　又此運動ニ依テ　喉頭結節ノ凸隆著シク外露ス　老年及ヒ羸瘦（つかれやせる）セル人ニハ　此結節ノ隆起ハ　殊ニ甚タシク外露スル者ナリ　然トモ女子ノ咽喉ニハ斯ル隆起顕レス　只頭ヲ傾クル時カ　又烈シキ働キヲナス時規ハル、事アリ

僧帽筋ハ　広ク平偏ナル筋ニシテ　頸ノ後部ヲ覆ヒ　下テ背後ニ至ル　此筋ハ　後頭骨及ヒ頸椎ノ棘状突起ヲ纏ヘル靭帯ニ撃着シ（つながる）又此突起ノ尖端若クハ　脊椎ノ棘状突起等ニ附着シ　其起始ハ　筋腱ニシテ　速カニ肉トナリ　其繊維ハ　開散シ　斜メニ上方ヨリ下ル繊維アリ　又斜メニ下方ヨリ上ルモノアリ　其中間部ヨリ　分技シテ　肩ノ方ヘ至リ　鎖骨及ニ肩胛骨ノ肩頭突起ト肩胛棘ヨリナレハ　角偶ニ輻湊シ（あつまる）テ　終ニ鎖骨及ヒ其中部ト　肩胛棘ノ大部及ヒ其上角ニ附着ス

右ノ如ク　筋ノ附着スル所多端（多い）ナレハ　其働モ又多端ナリ　此等ノ附着ノ間隙ニ於ケル部分ハ　其各部分ニ於ケル収縮力ニ応シ　外方ニ膨脹シ　又此附着スル所ニ生スル皺ハ　其繊維ノ向方ヲ以テ　畧々（およそ）正角ヲナシ　皮慮上面ニ　其形ヲ示スヘシ

此筋ノ前方縁ハ　後頭骨ヘ附着スル所ヨリ下テ　鎖骨ニ至ルノ間ニテ　外面ヨリ接触シテ　窺フ「ヲ得ヘシ

頭ヲ背後ニ垂レハ　皮慮多クノ皺襞ヲ生ス　此時第七頸椎ノ棘状突起及ヒ第六頸椎ハ　全ク見ヘサルヘシ

頸ヨリ肩ニ至ル外形ニ　美麗ナル弧綿ヲ現ハスハ　此筋ノ形ニヨルモノナリ

咽喉部ノ諸筋ハ　前條ノ諸筋ノ下際ニアリ　且ツ此編ニ於テハ　必要ナラザレハ　別ニ解明セス　此筋ハ総テ胸舌骨筋ト共ニ　皮下頸筋ニ依テ　包被セラレ　此皮下頸筋ハ　鎖骨ノ下方ナル胸ノ上部ノ皮慮ニ附着シ　上テ下顎骨ニ繋着ス

其一部ハ　猶上テ耳ノ方ヘ至ル　此筋ハ平扁広薄ニシテ　其下層ノ諸筋ヲ覆フノ用ヲナス

其作用ハ　口ノ角偶及ヒ頰部ヲ下方ニ掣キ　又頸ノ皮膚ヲ斜メニ索下スルノ力アリ

肯関節

人体中最重要ナル肩関節ハ　其夥多（あまた）ノ運動ヲ営ムヲ以テ　殊ニ精細ノ注意ヲ要ス　肩部ヲ説明スルニハ　其方向位置ヲ変シタル各種ノ図ヲ掲クルヲ便トス

最初ノ図ハ　肋骨ヲ透徹シテ　前面ヨリ望ミタル肩胛骨ヲ示シ　又其肩頭突起烏嘴突起及ヒ上膊骨頭ヲ挿入スヘキ浅窩等ヲ現ス　即第五版是ナリ

第五版

此図ニハ又鎖骨ノ位置ヲ示ス　鎖骨ハ強堅ナル靭帯ニ依テ　肩頭突起及ヒ烏嘴突起ニ附着シ　一ツ弧形ヲ組整シテ　其下方ニハ　上膊骨ヲ繋ケリ　而テ此外部ハ　種々ノ筋ヲ以テ包被ス

肩胛骨ハ　肋骨ノ後部ニ於テ　其運動ヲ自在ニス　鎖骨ハ肩ニ繋着シテ　肩ノ運動ニ従ヒ　上下前後ニ運動ス　上膊骨ハ　浅窩ニ挿入スルヲ以テ運動更ニ自在ニシテ　肩胛鎖骨ノ運動ト　全ク異ナレトモ　凡ソ此諸骨ノ運動ハ　同時ニ栄ムモノナリ

故ニ臂ヲ挙クレハ　肩胛ハ其角度ヲ変シ　従テ上揚シ　鎖骨ノ外端モ　亦共ニ上隆シ　其内端ハ　胸骨結接部ヲ支柱トシテ転回スヘ

シ

第六版

臂ヲ上揚セルトキハ　此図ノ如キ有様ヲナスヘシ　臂ヲ前方ニ衝出シ（突き出る）又ハ物ヲ牽引シ　或ハ打繋スル時ハ　肩胛骨ハ肋骨ノ後側ニ沿ヒ　稍ヤ接擦シ（ふれる）　鎖骨ハ働力ノ強弱ニ応シ　前方ヘ傾斜ス　又両腕ヲ前方ヘ延ヘ　合掌セル人物ノ骨格ヲ背後ヨリ見レハ　両肩胛骨ノ間隔（へだたり）大ヒニ広カルヘシ

両腕ヲ以テ　物ヲ牽引シ　又衝出スルトキハ　運動二様ニ分カレ　牽引スレハ　骨ハ其各所ノ結節部ニ於テ　稍ヤ分離シ　為メニ手腕ヲシテ　長カラシム　又其衝出ノトキハ　右等ノ関節部ハ　総テ密接シテ　手腕ノ丈稍ヤ短縮スヘシ　但シ斯ル腕ノ伸縮ハ　勿論僅少（わずか）ノ差アルノミニシテ　諸筋モ亦右等ノ運動ニ応シ　其形ヲ変化スルモノナリ

腕ヲ後方ヘ投スレハ　肩胛骨ハ　肋骨ノ後部ニ沿ヒ接擦シ　両腕ヲ後方ヘ延フレハ　両肩胛骨ハ相互ニ近接スヘシ　而シテ肩ノ全部同時ニ上方ニ揚カルヘシ

第七版

肩胛鎖骨ノ種々ノ運動ニ従ヒ　其位置ヲ変スル┐ハ一々説示スル┐難ク　又肩胛突起ノ位置モ　其変動ニ応シ　之ヲ分明ニ知ル┐ハ難シ　且ツ体外ニ著シク顕露セス只些カ其跡ヲ現スニ　過キサルナリ　学者古昔ノ彫像ニ就テ穿鑿セハ　自カラ悟ル所アルヘキナリ

肩関節ヲ構造スル諸骨ハ　種々ノ筋ヲ包被セラル┐ハ　前既ニ一言セリ　今其筋ヲ説明スヘシ

其第一ハ　三稜筋ニシテ　七束ノ筋ヨリ成レリ　猶ヲ簡単ニ分テハ　三束トモナル其骨ニ附着スル所ハ　前面ニテ鎖骨ノ外端ヨリ其三分一程ノ所ニ渉リ　中央ハ　肩頭突起ニ沿ヒ　後面ハ肩胛骨ノ棘状突起ニ繋着ス

此三部ニ附着スル筋ハ　下行スルニ従ヒ　集合シテ　上膊骨ノ中央ニ附着ス

第八版

三稜筋ハ　上膊骨頭ヲ包纏セル　強堅ナル筋ナリ　其三重ノ力ニ依テ　腕ヲ前後ニ挙上シ（ひっぱる）　兼テ内外轉ヲナス　而テ力ヲ入ル、時ハ　著ルシク膨脹スルモノナリ

腕ヲ挙上スル時ハ　此筋ハ肩頭突起ノ周辺ニテ強ク膨脹シ　突起部ハ　為メハ窪ヲ生スヘシ

三稜筋ノ最後ノ一束ハ　肩胛骨ノ棘（はり）ニ附着シ　其位置ハ　前面ノ者ヨリ下方ニアルヲ以テ　全ク側面ヨリ見レハ　筋ノ形状異様ニシテ　稍ヤ扁平ナリ　斯ル形状ハ　腕ヲ後方ヘ運フ時　著ルシク知ラルヘシ　此時上膊骨ノ団円ナル（まるい）骨頭ハ　前方ヘ圧出シ　肩ノ前方ニ　大ヒナル凸隆ヲ生ス

凡ソ一方ノ腕ヲ上揚スレハ　頭ハ自然ニ　他方ノ肩ノ方ニ傾クヘシ　是レ頸筋ニ相逆フヲ以テナリ　又一方ノ腕ヲ揚クレハ　全体ノ平衡ヲ保タンカ為メニ　身体各部ノ形状ヲ変スル者ナリ　学者其位置ノ変化方向ヲ能ク注意スヘシ

第九版

女子ノ三稜筋ニハ　中央ノ外方ニ於テ　些カ押圧サレタル部アルヲ見ル　是レ恐ラク　骨ニ附着スヘキ部ノ筋腱男子ヨリ　肉部多量ナルヨリ　斯ル有様ヲ生スルナルヘシ　或ハ又　此部ノ皮膚甚タ厚キニモヨルヘシ

又鎖骨ノ外端ノ関節ニ於テ　腱膜ノ甚タシキ凸隆ヲ見ル　古昔（むかし）ノ彫像及ヒ美麗ナル活人ニ就テ　能ク注意セハ　自カラ明瞭ナルヘシ

胸筋ハ　腕ヲ形成シ　鎖骨及ヒ胸骨ノ内方半ノ所ニ附着シ　又第二第三第四第五肋軟骨及ヒ　第六肋骨ニ附着ス

胸筋ハ　纖維状ノ筋鞘ニ由テ　被包セラレ　広ク扁平ナル面ヲナシ　体ノ前方ニ向ヒ　僅カニ弧面ヲナシ　次テ左右ヘ延長シテ　三稜筋ノ直ニ下方ナル上膊骨ニ結合シ　其形状三角ナリ

肩関節ノ前方ヘ運動スル時　胸筋ハ自カラ　胸部ノ方ニ牽引シ　其纖維中　種々ノ分部ノ収縮スル方向ニ応シ　真直ニ牽引シ　或ハ斜メニ上方ヘ引キ　又ハ斜メニ下方ヘ牽掣ス　胸筋ハ　三稜筋ニ結合スルノ部ニ近ツクニ従ヒ　多少下圧サレ　又ハ其皺襞ヲ常ニ見ルモノナリ

又タ腕ヲ延ヘ　高ク上揚スル時ハ此筋大ニ拡張スルカ故ニ　其纖維及ヒ腱部ニ少シク異常ヲ起シ　其腱部ヲ皮膚上ヨリ窺フ「ヲ得ル「アリ

腕ヲ前方及ヒ側方ニ上掣スル時　腋下ニ深キ凹窪ヲ生ス　然レトモ　高ク上方ニ掣スレハ　此凹所ハ　浅カルヘシ　殊ニ女子ニ於テハ　同時只些カ凹窪ノ跡ヲ見ルノミ

軀幹

第十版

胴部ノ筋ハ　左右互ニ同等ナレハ　其一方ニ就テ　筋ノ組成ヲ解クヲ以テ　足レリトス

軀幹ヲ縦ニ折半スル線ヲ中線ト名ク　此線ハ　両鎖骨間ノ凹窩ヨリ起リ　胸骨面ヲ下リ　軀幹全部ヲ通経スル線ナリ

胸筋ノ中間ニ胸骨溝アリ　即チ其両側ニ於ケル種々ノ突起ヨリ生セルモノナリ　又胸骨ノ下端ニ畧々菱形ヲナス凹陥部アリ　即チ両側ニ於ケル第七肋軟骨ノ突起ニ依テ　起レルモノナリ

古昔ノ彫像ニ　此突起部ヲシテ　著シク広キ彎弓状ヲ顕ハサシメ　肋骨ノ形ト能ク平衡シ　胃窩ヲ圍繞セル（かこむ）ヲ見ル　斯ル彎弓状ノ突起ヲ甚タシク拡張シ　真景ト大ニ異ナラシムルハ　古昔彫像家カ相互ニ定メタル「ト思ハル

然レトモ人体ニヨリ　或ハ右ノ如キ形状ヲ有チ　却テ其通常ノ形ヲ有タサルモノ　往々之レアリ

胸骨溝ノ直ニ両側ニ　胸骨肋骨関節ノ突起アリ　其上方ノ二関節ハ　殊ニ著シク外露ス　羸瘦セル（やせた）人ニハ　其突出更ニ甚タシク　且ツ胸筋モ従テ平扁薄弱ナレハ　右等ノ関節部ハ　惣テ（みな）外露スル「著シキモノナリ

男子ノ乳頭ハ　大概第五肋骨ト同シ一線上ニアリ　然レトモ筋ノ運動ニ応シ一定セス　胸骨ノ下端ヨリ以下腹部ノ諸筋モ亦中線ニヨリテ二区ニ分カル

直腹筋ノ上端ハ　胸骨及ヒ第五第六第七肋軟骨ニ繋着シ　直下シテ　体ノ下端ニ於ケル耻骨ト結合ス

直腹筋ノ輪郭ハ　体ノ側面ヨリ見レハ　人々各々異ナル所アリ　且ツ各種ノ運動ニヨリ変化定リナシ　故ニ能ク其形状ヲ知ラントセハ　先ツ古昔ノ彫像ニ依ルヲ良トス

畢竟斯ル彫像ハ　其各部ノ形極メテ純良ナルヲ以テナリ

体ノ上部ヲ前ヘ屈スル時　直腹筋ハ　其外部ノ皮膚ニ多ク皺襞ヲ生シ　其他横走腱条ニヨリテモ　皺ヲ生スルナリ　此腱条ハ　其傍ノ諸筋ノ腱帯ノ広延セルモノト　其外端ヲ結合ス　此腱条ハ　筋ノ外面ニアリテ　其全層ヲ貫クモノニハアラス

且ツ通常三条ニ分チ　体ノ前面ヲ分画スルノ用ヲナス　其個数及ヒ位置ハ　人々等シカラサル故ニ　前ニモ云ヘル如ク　古昔ノ彫像ニ就テ　其善良ナル形ノ範例ヲ得ルヲ宜シトス

外斜腹筋ハ　斜メニ下行セル筋ニシテ　直腹筋ト結合シ　腸骨ノ鶏冠突起ノ傍ニ　純美ナル彎凸部ヲ顕ハセリ　古昔ノ彫像ニ此部ニ美麗ニ刻メルモノアリ

其重ニ附着スル所ハ　腸骨ノ上縁及ヒ下方ナル肋骨ノ七片ニアリテ　斜メニ鋸歯（のこぎりの歯）状ヲナス

外斜腹筋ノ維維ハ　其方向ヲ種々ニ取ルヲ以テ　一々明晰セント欲セハ　多分ノ紙面ヲ塞カサルヲ得ス

腹骨ニ附着スルノ点　著シク彎凹スルハ　其筋腱ニ応スレハ　筋肉急ニ肥満スルカ為メナリ　故ニ骨格ニ於テ　骨ノ突起ハ　活人ニアリテ　却テ凹窪ヲナシ　筋肉増々強剛ニシテ　肥豊スルニ応シ　此凹窪ハ　愈々深カルヘシ

右ノ如キハ　大概肥満セル人ノ骨ノ強キ突起部ニ於テ　筋ノ附着スル所ニ起ルヲ常トス　故ニ痩セタル人ニハ　斯ル凹窪ヲ生スル「

ナシ

骨格中大ヒナル突起ハ　活物ニ於テ　親シク見ラルヘキモノナレトモ　今人体ヲ画カントスルニ　斯クノ如キ骨ノ突起ヨリ他ノ突起ノ間ニ　直ニ線ヲ引キ　以テ人像ノ輪郭ヲナシ得ルト思フハ　素ヨリ誤リニシテ　凡ソ骨面ニハ　種々被包セル筋アリ　皮膚アリテ以テ表面ノ形状ヲ整フルカ

故ニ　只骨ノ突起ノミヲ漂準トシテ　人像ヲ画クハ不可ナリ

大鋸筋ハ　人体ノ側方ニ見ユル鋸歯状ノ筋ナリ　此筋ハ上方ナル肋骨十片ニ附着シ　其二歯ハ　初メノ二肋骨ニ附着シ　他八歯ハ　続テ他ノ八肋骨ト結接シ　斜メニ脊後ノ下方ヘ向ヒ走リ　外斜筋ト一組ヲナシ　一線中ニ鋸歯状ノ連続ヲ作ル

斯ク外斜筋ト組伍セル後チ　斜メニ後方上方ニ走リ　肩胛骨ニ附着シ　是ヲ前方及ヒ下方ヘ牽引スルノ用ヲナス

然レトモ肩胛骨ノ位置　静止セル時ハ肋骨ヲ外方ヘ上揚スルノ力アリ　即チ烈シキ呼吸ヲ要スルノ運動ニ於ケルカ如シ

又腕ヲ上揚スル時ハ　此筋ハ一層外部ニ現露シ　古昔ノ彫刻物中ニ其例ヲ見ル

第十一版

濶脊骨ハ　脊部ノ大ナル広キ筋ニシテ　肩胛骨ヨリ　以下ノ部分ヲ広ク覆ヘリ

其附着ノ点ハ　第六脊柱ノ点ヨリ起リ　漸ク下テ最下方ナル四ノ肋骨ニ附着シ　是ヨリ数多ノ繊維トナリテ　上方ヘ走リ　上膊骨ノ下ナル　粗ナル凸起ニ至リ　長ク薄ク且ツ強キ腱ト成リ　以テ爰ニ附着ス

此筋ハ　肩胛骨及ヒ上膊骨ヲ後下方ヘ引テ　又肩胛骨ノ下偶ヲ保持シ　之ヲシテ肋骨ノ上面ヲ遊揺セシメ　此骨ノ位置変化スルニ従ヒ　其骨形ヲ外部ニ顕ス　又大鋸筋ト等シク　腕ヲ上方ヘ揚ケ　其位置ヲ保ツ間ハ　此筋ハ　其附着スル所ノ　肋骨ノ上ニ　其動作ヲ及ホス者ナリ

体ヲ前方ヘ屈スル時ハ　此筋ハ為メニ伸張シテ　其下層ノ肋骨ヲ外部ニ突起セシム

此広キ筋ノ為メニ　被包セラレタル下層ニ　長脊筋（ロンギュスシユームドルジー）ト名クル肉質ノ長ク円（まる）キ筋アリ

其一部ハ　肋骨ノ諸角偶ト脊椎ノ突起ニ附着シ　下方ハ　腸骨及ヒ薦骨ニ附着セリ

体ヲ後方ヘ屈スレハ　此筋ハ数也（他の誤り？）ノ横行皺襞ヲ生ス　其伸縮ノ形状ハ　体ノ屈伸動作ノ趣ニ依ルヲ以テ　能ク実体又ハ古代ノ彫像ニ就テ攻究セサル可ラス

凡ソ軀幹中　殊ニ軟カニ屈曲スルハ　腰部ニ於ケルヲ最モ大ナリトス故ニ　一方ノ皮膚ニハ　横ニ皺ヲ生シ　他方ハ伸張スル「此部ヲ以テ　更ニ著シキモノトス

肩及ヒ腰ノ幅ハ　男女各相違ナル「ハ　既ニ骨格ノ部ニ於テ説明セシカ　又肋骨ノ形ニ於テ　男女ノ間ニ　些少（さしよう）ノ差アリ　即チ女子ノ肋骨ハ　其彎弓ノ度　男子ヨリ少ナシ　又男女骨盤ノ差ノ如キハ　別ニ解説ヲ要セサルモ　自カラ分明ナルヘシ

第十二版

上肢

臂（ひ）ハ手ト共ニ　其構造　最モ精巧ヲ極メ　最モ美妙ナル部ニシテ　他動物ノ曾（かつ）テ受ケサル所ノ天賦ノ賜（たまもの）ナリ

凡ソ体ノ外面ハ　何レノ部ト雖（いえ）トモ　手ノ達セサル所ナク　且手ノ運動ハ　体中ノ諸部ニ起ル運動ト相結合シ　其用多端ニシテ　実ニ限リナカルベシ

臂ノ骨格ハ　肩胛骨及ヒ鎖骨ヲ除キ　下肢ノ如ク　三骨柱ヨリ成リ　其一柱（いっちゅう）ハ　上部ニアリ　他ニハ　下部ヲ構造ス　但（ただ）シ手掌及ヒ腕ハ　数片ノ骨ヨリ成リ　前章ニ於テ既ニ解説セリ

初学者　臂ヲ画クニ　腕骨ノ一組ニ注意セスシテ　恰（あたか）モ手ヲ前膊骨ニ結接セルカ如クナス「応々（おうおう）之レアリ　宜（よ）ク注意スヘシ

総テ上肢下肢ノ構造ハ　畧々同様ナレトモ　前膊骨ニハ　其固有ノモノアリテ　下肢トハ異ナル所アリ　即チ撓骨旋轉シテ　尺骨ト

斜メニ交互スル是ナリ　故ニ上膊骨トノ結節部　即チ臂関節ハ　斯ル運転ニ適応スル構造アリテ　膝部ノ結節モ大ニ異ナリ

第十三版

撓骨転シテ　尺骨ト交互スル時ハ　拇指（おやゆび）ハ内方ヘ向ヒ　手掌ハ　体ノ後方ヘ向フベシ

手腕ノ将ニ働カントスル時ハ　先斯ル運動ヲ営ムモノナリ　撓骨尺骨互ニ相平列スル時ハ　拇指ハ外方ヘ向キ　手掌前面ヘ向フヘシ

右二様ノ運動ヲ営ムノ筋ヲ　内廻転筋及ヒ　外廻轉筋ト称フ　又右ト等シク　腕及ヒ他四肢ノ諸部ヲ屈曲セシムル筋ヲ　屈曲筋ト称ヘ　四肢ヲ長延セシムルモノヲ展伸筋ト名ク　其屈曲筋ハ　体ノ前部ニアリ　展伸筋ハ　其後部ニアリ

惣テ臂ノ関節部ハ　其骨柱ノ方向ト正角ヲナサス　臂ノ外転ノ時ノ位置ハ　くノ如キ角度ニシテ　此角度ハ　斯ル体勢ノ時　臂ノ上下部ニ於テ　種々ノ方向ニ顕ハル　然レトモ内転ニ於テ　全ク臂ヲ外方ヘ伸ス時ハ　其方向真直ナリ　是レ実際目撃スル所ノ有様ナリ

又手掌ノ有様ヲ見ルニ　更ニ其多分ノ部ヲ占ムルハ　拇指ノ方位ニ於ケルヲ多シトス　掌ヲ開伸スル時　臂ノ一辺ヨリ腕ヲ通シ　一線ヲ引ケハ　其方向ハ　小指ノ外縁ニ沿ヒ　手ノ外方ニ走ルヘシ

又同シ線ヲ　拇指ノ方ニ引ケハ　拇指ト食指ノ手ノ外方ヘ除キ　中指ニ沿ヒテ直行スヘシ　古昔エジプト人ノ画ニ　斯ル有様ヲ過度ニ画ケルヲ見ル　第十四版ノ図ノ如シ

手ハ其外面ニ於テ凸彎シ　内面ニ於テ凹彎ス　掌骨ト指骨ノ諸関節部ニ　係ル骨ノ起隆ハ　中指ノ関節最モ大ナリ

肥満セル女子及ヒ兒子（子供）ニアリテハ　此関節却テ凹窪ヲナス　是等ノ関節部ニハ　扇状ヲナセル展伸筋腱ノ附着スルアリ　癯セル人ノ手ニハ　皮膚上ヨリ　之ヲ見ル「ヲ得ヘシ

指拇ノ展伸筋腱ハ　最モ著シク外露シ　撓骨ノ上ヲ過クル者ト　内外二条ニ別□（判読不能）此両腱帯ノ間隙ニハ　長キ三角状ノ凹窪ヲ作ル

又拇指ノ内側ニハ　多分ノ肉質ノ塊積（かたまり）ヲナシ　小指ノ方ノ筋ト相対ス

指ヲ手ノ内部ニ曲ル時ハ　各指掌中ノ中央一集合スルノ傾アリ　拇指及ヒ各指ノ関節ニ於ケル方向ト　掌骨ノ結接部ニ於ケル各指ノ

角度ハ　活物ニ就テ　能ク実見セハ　明カニ弁知セラルヘシ

腕骨ノ両側ニ著シキ骨ノ突起アリ　其内方ナルハ　尺骨頭ニシテ　外方ニ於ケルハ　撓骨ノ下端ナリ　此下端ハ　尺骨端ヨリ其位置稍ヤ下方ニアリ

臂関節ニ於ケルト臂骨ノ内踝(ないか)ハ　甚タ大ナル突起ヲナス　然レトモ肥豊セル女子ノ臂ニハ　却テ凹陥ヲ顕セリ

臂関節ノ突起ニ付テハ　注意スヘキ┐アリ　蓋(けだ)シ臂ヲ曲ル時　前膊骨頭ハ　上臂骨ノ下端ヨリ外方ヘ突出シ　為メニ下臂ノ丈稍ヤ長ク見ユルヲ以テナリ（第十五版）臂ノ垂下セル時ハ　前膊骨ニ於ケル　右ノ如キ突起ハ

前膊骨ニ於ケル　右ノ如キ突起ハ　上臂骨端ノ内外踝ノ浅窩ニ挿入スルヲ以テ　更ニ外出セス

上肢ノ働キト　其形状ノ変化ハ　限(かぎ)リナキ者ナレハ　之ヲ明晰スルハ　頗(すこぶ)ル難シ　故ニ今爰ニハ　最モ主要ナル筋ノ名称ヲ表記シ以テ其作用ノ大体ヲ解クノ便トス　其附着スル諸点ハ　図ニ依テ弁知セラルヘキナリ

前面ノ臂　第十二版

一　十三稜筋　デルトイド

二　膊二頭筋　バイセプス、ブラチ

三　三頭筋　トライセプス、ブラチ

四　廻前円筋(かいぜんえんきん)　プロナートル、ラジー、テルス

五　廻後長筋　ソピナートル、ラジー、ロンギユス

六　長掌筋　パルムリス、ロンギユス

七　尺骨内筋又尺骨腕屈筋　フレッキソル、ロルピー、ウルナリース

八　撓骨内筋又撓骨腕屈筋　フレッキソル、カルピー、ラジアリス

九　短拇指筋

十　短手掌筋　　パルマリース、ブレビース

三稜筋ハ　肩部ノ重要ナル筋ニシテ　前既ニ解説セリ　此筋ノ前内側ニ　膊二（うで）頭筋アリ

其一頭ハ　短キ筋腱ニシテ　肩胛骨ノ烏喙突起ニ附着シ　其長頭ハ　上臂骨ノ大小結節間溝ヲ過テ　肩胛骨ノ関節窩ノ上縁ニ附着セリ

此両頭ハ　互ニ合一シ　一片ノ肉質ト成リ　臂関節ノ上部ニ至リ　再ヒ腱ヲ作リ　撓骨結節ニ膠着シ　下臂ヲ下ケ　広キ腱膜ト成リ　遂ニ腕骨ニ達ス

強烈ノ働キヲナス時　此筋ハ　其肉質部ニ於テ　甚タシク収縮シ　外部一膨脹スヘシ　然レトモ　其平扁ナル形状ハ　猶多少前面ニ存ス

第十六版

三頭筋ハ　二頭筋ノ両側ニ於テ見ラルヘキ筋ニシテ　上臂ノ全後外面ヲ領ス　其作用ハ　下臂ヲ拡開スルニアリ

後面ノ臂　第十六版

一　三稜筋

三　三頭筋　外頭　長頭　内頭

五　廻後長筋

七　尺骨内筋

十二　外長撓骨筋　ラジアリス、エキステルナス、ロンギュス

十三　外短撓骨筋　ラジアリス、エキテルナス、ブレビース

十四　総指伸筋　エキステンソル、ジ、トルム、コンムニス

十五　十六拇指展伸筋

十七　外尺骨筋　エキステンソン、カルビ、ヴルナリース

第十七版

徳義上ノ適合（モラール、フット子ス）　又式ノ恰好（かっこう）

恰好ナル者ハ　物状ノ有様ニシテ　看客カ一目ノ中ニ　其高幅ト正側面ノ差ヲ認識シ得ル処ノ者ナリトス

物形ノ美観ニ係リ　恰好ナル者ノ人心ヲ感スルヨリシテ　亦（また）別ニ　一種ノ項目アリ　是ハ物形ノ外貌ノ有様ト　其用途ノ目的トヲシテ　互ニ相符号セシメント欲スルノ感情ナリ

此事ハ建築ニテモ　陶器術ニテモ　一目直ニ　其然ル処ヲ察セラル、ヿヲ要シ　物体ノ上ニハ　一種切要ノ性質ニシ　腕骨（わんこつ）ニ於ケル諸筋腱ヲ一個ニ組織スルノ靭帯ヲ総腕靭帯ト名ク

側面ノ臂　第十七版

一　三稜筋　デルトイド

二　二頭筋

三　三頭筋

五　廻後長筋　ソビナードラジーロンギュス

九　拇指筋腱

十二　外長撓骨筋　ラジアリス　エキステルナス、ロンギュス

十四　総指指伸筋　エキステンソル、ジゞトルム、コンムユニス

第十八図

此図ハ重要ナル脈絡ノ位置ヲ示スモノナリ　此脈絡ハ　臂ノ働ニ応シ　顕ハル丶トキト　又顕ハレサルトキアリ　故ニ是ヲ画クニハ常ニ能ク注意シテ　其適度ヲ誤マラサルヲ要ス

古昔ノ彫刻ニハ　其確実ナルモノヲ顕ハスカ故ニ　以テ摸範トナスヘシ

女体ニ於ケル　結節状突起ト筋ノ突起ハ　体外ヘ顕ハル丶「僅少ナリ　且ツ筋ノ肉質多量ニシテ　腱部尠ナク　且ツ筋ノ凹窪セル部ト角偶ヲナス部ハ柔軟ナル皮膜ヲ以テ能ク被包セラレ　全部皆ナ　円裏ナリ

殊ニ女子ニ於ケル二頭筋ノ如キハ　其分裂甚タ僅カニシテ　三稜筋ハ　其形男子ト甚タ異リ（第九版ノ図ヲ参観スヘシ）

其他ハ　男子ト同シケレトモ　肩ノ幅狭少ナルト　髖骨ノ大ヒニ拡開セルカ為メニ　両臂ヲ側辺ニ垂ル丶トキハ　稍ヤ異ナル所アルヲ見ルヘシ

下肢　第十九版

下肢ノ筋ハ　其作用ニ応シ　相互ニ結合スル所甚タ多シ　故ニ其解説繁雑ナルヲ以テ　斯ル小冊子ノ委ク尽ス可モノニアラス

依テ図上ヲ以テ　脛部及ヒ股ノ諸筋ノ名称ヲ示シ　其形状ト位置ヲ弁明セシメント欲ス　又膝関節ハ　人体形状中至要ニシテ　且ツ純美ナル部ナレハ　些カ注意ヲ要スルカ故ニ　膝ノ屈曲セル二様ノ趣ヲ第二十及ヒ第二十一ノ図ニ示セリ

膝ヲ曲ケタルトキハ　其膝蓋ハ　大髄骨ト小髄骨ノ関節部ヨリ生セル浅窪ノ為メニ稍ヤ内ヘ退クヘシ

男女ノ間膝ノ形状ニ差異アルハ　多分骨格ヨリ生スルモノナリ　女子ニアリテハ　髖骨大ヒニ拡開スルカ故ニ　大腿骨ノ下端ヲシテ互ニ内方ヘ傾カシメ（体ノ正シキ平衡ヲ得ンガ為メ）下腿骨ノ結合ニ於テ　角度ノ差ヲ生シ　膝ノ内部ニ大ヒナル突出ヲナス且ツ加フルニ　其膝部ハ　脂肪多量ナル皮膚ニテ　包裹セラルヽヲ以テ　男子ニ比スレハ　其形肥大ナリ

手足ノ運動ヲ察スレハ　一側ニ起レル筋ノ突隆ハ　他側ニ於ケル突隆ニ依テ　其平釣ヲ保ツ

建築師ハ　家屋ヲ構造スルニ　其外円周辺ニ係ハリ　其平均ヲ保ツヲ要ス

故ニ家ノ一側面ハ　常ニ他側ト平衡ヲ得セシム　今人体ヲ構造スルノ大建築家ハ　天然ノ雅趣純美ヲ以テスルノミナラス　一層堅牢ニ之ヲ構造セリ　其手足及ヒ全体ノ形状ニ係リ　右ノ如キ平均ハ　自カラ具備セリ

下肢諸筋　第十九版

前面の部

十八　内腸骨筋　イリアキュースインテルナス

十九　三頭内轉長筋三種（内轉長筋、内轉短筋、内轉大筋）　トランセプス、ベル、ヲツドクトル、ワンギュス

二十　櫛筋（しつきん）　ペクチナリース

二十一　溝股筋（こうこきん）　グラシリース

二十三　縫匠筋（ほうしょうきん）　サルトリュース

二十四　股直筋　レクタス、ヘモリース

二十五　股靭張筋（こしょうちょうきん）　テンソル、バアジナ、ヘモリース

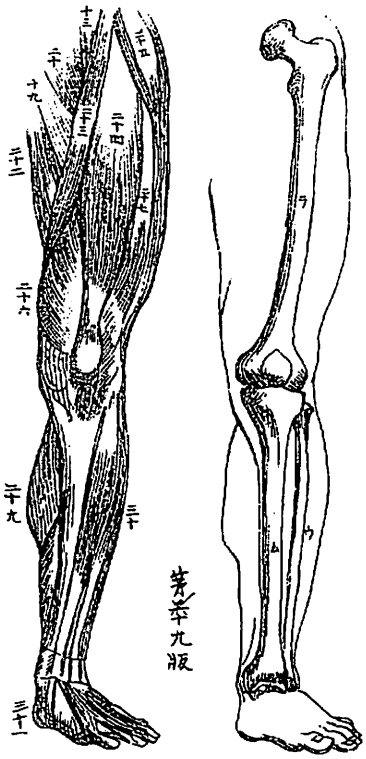
二十六　内大股筋　ウアスタス、インテルナス

二十七　外大大股筋　ウアスタンス、エキステルナス
二十八　前脛骨筋　チビアリス、アンチキユース
二十九　二頭腓腸筋　ガストロク子ニューム
三十　長趾伸筋（ちようししんきん）　エキステンソル、コンギユ、ジヾトルム、ペジス
三十一　大趾離放筋　アブドクトル　ポルリシスペシス

下肢諸筋　第二十二版

側面之部

三十二　大臀筋（だいでんきん）　グリユチユース、マキシムス
三十五　中臀筋　グリユチユース、メジユース



二十一　二頭股筋　イセプス、ヘモリクス
二十七　外大股筋　バスタスエキステルナス
二十五　股鞘脹筋（こしようちようきん）　テンソルハジナヘモリス
二十九　二頭腓腸筋　ガストロク子シユース
二十八　前脛骨筋　チビアリスアンチキユー
二十四　股直筋　レクタスヘモリス

下肢諸筋　第二十三版

後面ノ部

三十二　大臀筋　クリユチユースマキシムス
二十一　二頭股筋　バイセプスヘモリユース
十九　三頭内轉筋
三十三　羊膜様筋　セミテンプラノース
三十四　羊腱状筋　セミテンジノース
二十二　薄股筋　グラシリス　一部
二十三　縫匠筋　サノトリアス　其辺縁
二十九　二頭腓腸筋　ガストロク子シユス

足跗筋ハ　脛ノ後下部ニアリテ　二頭腓腸筋ト共ニ強緊ナル靭帯ヲ以テ終ル

此靭帯ハ　跗骨ニ附着シ　著シキ突隆ヲナス　足ヲ画クニハ　前膊ト手掌ノ結合ノ如ク　脛ト足蹠ノ結合ヲ能ク注意シ　脛骨ノ位置ト　僅ニ斜メニ　足蹠ヲ置キ　内踝ヲシテ　外踝ヨリ強ク　外出セシムヘシ

凡ソ全骨格ヲ通シテ　骨柱相互ノ結合ヲ見ルニ　其関節ニ於テ　正角ヲナスノ部之レナシ

此構造アルカ為メニ　吾人（われわれ）カ跳躍シ　又ハ打撃スルカ如キ　急遽ノ運動ニ対シ　激烈ル衝撞ヲ免カルナリ

且ツ皮膚上面ハ　全体ヲ通シテ　軽淡ナル波動状ノ線ヲ保テリ　是レ人体ハ　蕩然（なに一つ）美麗ナル外観アリテ　若カモ弾力アル所以ナリ

人体解剖　終

Kinkichiro Honda, the Introducer of Art Anatomy in Japan

The history of artistic anatomy has a long tradition, which dates back to the 15 th century in Italy. After the Meiji Restoration our government adapted the Western arts and sciences to modernize Japan. So we engaged the service of experts from abroad in various fields. As regards the field of the fine arts, we invited guite a few specialists from Italy in the early days of the Meiji period.

In this essay I deal with Kinkichiro Honda (1850～1921), who first taught art anatomy to the pupils at "Shōgido", a private art school in Tokyo. Kinkichiro Honda was originally a samurai warrior of the Hiroshima clan. In March in the 4 th year of the Meiji Era (i. e. 1871), he came up to Tokyo to study English at Keiōgijuku, a school founded in 1868 at Mita by Yukichi Fukuzawa, where he stayed for about a year.

In the following year he became a probationer surveyor at the Kōbusho. While there he studied general subjects of learning, English and painting from English teachers and so on. Later on he suffered from beriberi and was compelled to resign his post, returning to Hiroshima, his home country. In the 7 th year of the Meiji Era (i. e. 1874), he went up to Tokyo again.

Honda had a long-cherished desire to study Western-style painting, when he heard that Shinkuro Kunisawa (1847～1877) was advertising for pupils for his newly established private art school "Shōgido" located at Hayabusacho Kōjimachi ward, Tokyo. Kunisawa returned to Japan after

studying English and painting in England for 4 years as a student of the Tosa Clan.

Kunisawa was not strongly built and was suffering from tuberculosis while he was still in Great Britain. In March of the 10 th year of the Meiji Era (i. e. 1877), he died of this chronic disease. He asked Honda to look after "Shogido" after his death.

Kunisawa brought home lots of books on art from England. Since Honda had a good knowledge of English, he enjoyed reading them after work everyday. Honda taught not only drawing pictures but geometry, perspective representation, human proportion and human anatomy to his pupils by translating these books.

The 13 th year of the Meiji Era (i. e. 1880) is remarkable for the beginning of teaching art anatomy in Japan. Honda started lecturing on art anatomy to his pupils once a week. The lecturer Yohei Tamakoshi at the school of medicine, Tokyo university started teaching the same subject at Kōbubijutsu gakko in January in the 14 th year of the Meiji Era (i. e. 1881).

Honda's lecture was exclusively based on *Artistic Anatomy of the human figure* by Henry Warren (1794~1879) contained in the Winsor and Newton's series of Hand-Books on Art, with numerous illustrations, vol. II. Winsor & Newton, London, 1856. Though what Goto taught to his pupils was nothing more than a repetition of Henry Warren's words, it was enlightening and instructive in the early art education in Japan.

22 April 2003

Prof. Takashi Miyanaga